



夕月の巫女

夕月斗織

前書き

これはネタ的に書いた作文です（小説とは口が裂けてもいいません）
ところどころ変なのはお見逃してください・・・・・・・・
これはフィクションで、実在の人物、団体とは一切、何の関係もございません
つまり、まったくのつくり話です。

なお・・・・・・・・主人公の夕月斗織は私の分身です
師匠、花月は私の師匠、スールの街森潮音は私のネット姉がモデルです
後、檜山夢幻斎、来栖ミサ、土御門高彬、高平、セント・ローザン女学院などは
私の作品の中の人物、団体です。パラレル・ワールドだと思ってください。

後・・・・・・・・声優さんの名前がちらほらしていますが
ご本人ではなく、あくまでも同姓同名の別人です。
なんとなくご本家にそっくりな別人です。

と、前置きさせていただいて・・・・・・・・

OK～な方はどうぞ・・・・・・・・

斗織

ゆづきとおる

夕月斗織は高校2年生で、夕月神社の一人娘だった。

ぼーとした性格の天然ボケで、あまりとりえはないが馬鹿がつくほど、まじめな性格だった。

父を早くに亡くし母と、神社の宮司をしている祖父との3人暮らし。

はっちーという名の猫を飼っていた。

はっちーは、父をなくしたその翌日にやってきた迷い猫で、真っ黒な美しい毛並みの緑の目をした美猫である。

その美猫に何故、はっちーなどと名づけたのか……

本名は八戒、通称はっちー

これは、彼女が愛読している某漫画の三蔵一行の腹黒キャラの中の人が彼女の愛してやまない声優で、“石田さんかわいけりゃ八戒までかわいい”というまったく不可解な偏った愛情からである。

お察しのとおり、斗織は声フェチで、皆がアイドルの追っかけをしている中一人で声優の追っかけをするイタイ子だった。

もちろん、アニメおたくでもあり、頭に腐のつく女子だった。

まあ、そんなことはどうでもいいのだが……

とにかく斗織はのほほんと生きていた……

今までは……

ある日の放課後、学校の下駄箱の前で向かい合う男子学生と女学生の姿を見て斗織は思わず身を隠した。

男子学生は・・・斗織の幼馴染、・・・^{いしだあきら}石田彰

笑顔のさわやかな、涼しげな瞳の美少年。動くたびにサラサラとゆれる黒髪は女学生の注目を浴びていた。

「ごめん、今はつきあうとか、そんな余裕ないから・・・」

彰の少し高めの柔らかな声が聞こえて来る

斗織は彰の美貌より、彼の、この美声に夢中だった。

(つきあう・・・って・・・)

動悸めまいがする・・・

彰が告白されているのは明確だ。そして、断っているのも・・・

涙ぐんで立ち去る女学生の見つめつつ、複雑な思いを抱く斗織を呼ぶ声がする。

「斗織ちゃん、隠れてるんだろ？出ておいで」

立ち聞きしていたようで、ばつが悪い・・・

「ごめん・・・聞くつもりなかったのよ・・・」

にこっ、軟化しそうな微笑を浮かべて、彰は前髪をかきあげる。

「知ってるよ、見てたから。」

「モテるね・・・相変わらず・・・」

靴を履き替え、斗織はうつむいたまま歩き出す。

「何？妬いてるの？」

後ろから追いかけてきた彰は、斗織の顔を覗き込む・・・

「妬いてない！」

「僕が好きなのは斗織ちゃんだけだよ」

え・・・

「だって、妹だから・・・」

妹のように好き・・・それは嬉しくもあり、悲しくもある。

「今日は、宮司さんに会いに行くから、一緒に帰ろう」

そう言って歩き出す彰を見つめつつ、ため息をつく・・・

「ところで斗織ちゃん、訊きたいことがあるんだけど・・・」

斗織の家に着き、客間に通された彰に、お茶とお茶菓子を運んできた斗織に彰はそう言った。

「何？」

斗織も、彰の向かい側のソファーに腰掛ける。

「学校以外の公共機関・・・銀行とか病院で、名前呼ばれると皆、思いっきり振り向くんだ・・・
・そんな珍しい名前じゃないのにさ・・・」

確かに。日本人に多そうな名前ではある。

「振り向いて、—あ、違った—って感じで皆、前に向き直るんだ、。しかも若い女の子ばかり・・・」

ああ・・・

訳はわかる。判らないはずが無い。

「彰君て、有名人と同姓同名なのよ」

しかも漢字まで同じだ。

「？そんなタレントいたっけ？お笑いの人？」

「声優・・・」

「もしかして・・・斗織ちゃんが今、最高にはまっている声優さん？」

うん・・・

「有名なの？」

湯のみをとり、茶を飲む彰に斗織はうなづく。

「そういえば・・・保志君も人気声優と同姓同名なんだって？」

二人のクラスメイト、保志^{ほしそうちろう}総一郎・・・

同じクラスに石田彰と保志総一郎がいるなんて、オタクとしては、ものすごく萌えるではないか・・・

「うん。そうだね」

彰は中学生の3年間で、田舎の山奥で暮らした。

何かに狙われて、身を隠すように・・・

斗織の祖父の指図だった。

そして高校入学と同時に東京に帰ってきた。

男女交際する余裕が無いのも当然だ。

彼は生まれつき靈感が鋭く、夢で過去と未来を渡る能力を持っていた。

さらに、隠された能力があり、それを引き出し利用しようとしている何者かが
いるらしい……………

その能力を斗織の祖父、^{ゆづきしょうえい}夕月松栄は封印しているのだ。

しかし……………斗織には判らない。

山奥に隠した彰を何故、また呼び出したのか……………

あまり物を考えずに来た斗織でも、時々考える事もある。彰に関しては特に……………

「最近、頭痛とかはしない？」

「うん、これのおかげだよ」

と彰は首にかけている勾玉を取り出して見せる。

松栄が渡したお守りの水晶の勾玉……………

子供の頃、彰には水晶を、斗織には瑠璃の勾玉を渡して肌身離さずつけるようにと
言いつけた。

それまでは彰は、激しい、原因不明の頭痛に悩まされていたが
勾玉のおかげで、ぴたりとやんだと言う。

「彰君……………宮司様がお呼びよ」

斗織の母、真季子が呼びにきた

「はい」

立ち上がって部屋を出る彰を斗織は見送る。

「ごめんなさいね、お待たせして」

真季子は、ごく普通の母親であるが、彼女は昔この神社の御神体を守っていた巫女だったと聞い
ている。

「宮司様……………彰君です」

ある部屋の前で真季子がそう告げた。

「お入りなさい」

老人にしては張りのある声が出て、真季子は戸をあけて、彰を促した。

松栄の書斎に入ると彰は、一礼をして机をはさんで向かい合う。

「どうだ、最近は？」

「夢にうなされる事が多くて・・・」

いつもの闇に飲み込まれる夢・・・

その瞬間に見える少女の顔がとても印象的だった。

少女は泣いていた。自分を見つめて泣いて、手を差し伸べていた。

これは彰の過去世

「気をつけろ、お前は闇に堕ちて、闇の眷族となりしもの。いつ黄泉の使者がお前を連れにくるか判らない」

子供の頃からいつも聞かされていた話。

平安時代の有名な陰陽師が、都の危機を救うために数千もの妖怪にその身を食わせ、妖怪もろともその身を消滅させたという。

転生した今も、その身には妖怪たちの妖力を宿している。

「負けてはならんぞ。われらは、お前を取り戻すために存在している。忘れるな。

特に斗織・・・あいつは・・・」

松栄は言いよどむ。

今まで封印してきた彰の力は、彼が18歳になるとき現れる。

松栄の能力を持って防ぎきれなくなる・・・

「ここに、住み込まないか？」

見張っていなければならない。そして、守らなければならない。

「ここには強い結界が張られている、家にいるより安全だ。石田にはもう話してある」

彰の父は、この神社の神官を勤めていて、彰の状態をよく把握していた。

「そうですか、お世話になります」

彰の笑顔の奥の苦悩はいかほどか・・・

自らを守るために、何人もの人が心を砕き、動いている。しかし、構うなどとは言えない自分の敗北は、夕月神社の敗北となる・・・

まるで戦国武士の大將だ。

どのような犠牲を出しても、大將の首さえ無事なら勝利。

兵が無傷でも大將の首を取られれば敗北・・・

周りのためにも、彰は負けるわけにはいかなかった。

背負った宿命の重さは計り知れない、が逃げる訳にも行かない。

神社に生まれたばかりに、斗織も幼い時から松栄に修行を強いられている。

精神と肉身の鍛錬・・・

普通の女学生のように生きられない彼女が、そんな苦勞のかけらも見せることなくのほほんと生きているではないか・・・

まるでそれが彼女の日常の一部のように。

「今日からおいで」

今日呼ばれた理由は、この事だった事を彰は知る。

松栄は多くを語らない。

優しい笑顔の奥に、隙ひとつ無い鋭い瞳をかくしたこの宮司は、神託を受けて行動する。

ゆえに、彼の理解不可能な指示にも周りは素直に従う。

そして・・・後でその意味はわかるのだ・・・

彰は今まで、これといった修行をしてきたわけではない。

ただ・・・

怒らない事、この ^{ぎょう}行 を行ってきた。

感情のコントロール、血気怒気を征める訓練だった。

たやすいようで、これは血のにじむ訓練だ。

いつも感情を平穩に保つ・・・

—いいか？彰、血気怒気には魔が入る、お前が自分を守る術は、魔に付け入る隙を与えない事だ—

7歳の時から、そう言われて続けてきた。

思えば、斗織のボケは自分に向けられたエールだったのかも知れない。

彰の怒りをクールダウンさせるための・・・

そんな時、握られた斗織の手は彰の手とともに怒りに震えていた。

にも関わらず笑顔で、言うのだ・・・

—ブツがぶった—

今時、誰も言わない駄洒落を・・・

—布団がふっとんだ—

そんなタイミングの悪さに、いつも呆れて笑っていた。

斗織は妹ではない・・・自分はいつも斗織に守られていた。

—約束です。次は貴方を必ず守ります・・・—

夢の中の少女の、その言葉が耳を離れない。

すぐ、自宅から身の回りの物を持ち出し、彰は夕月神社に移り住んだ。

細かいものは時々、自宅に戻り、そのつど運べばいい。

松栄の言葉は絶対だ。この神社にいる全ての者がそれに従っている。

納得がいこうが、いくまいが、それが自分を守るためなのだ。

その夜、浴室から自室に帰る途中の廊下で、彰は中庭に一人の巫女装束の少女の姿を見た。

松の大木に寄り添うように、月を見上げて佇むその姿は、夢の中の少女を思わせた。

一月子様ー

何度も心の中で呼びつつけ、ついに声に出して呼ぶ事の無かった名前。

帝の末娘である彼女は、普段は女三宮、宮様と呼ばれていた。

にゃあ～

足元にやってきた猫、八戒に気づいて彰は我にかえる。

しゃがんで、猫を抱き上げ微笑む。

「久しぶりだねえ・・・はっちー」

この猫は斗織になついていて、片時も離れないが、彰が現れると必ず傍に来る。

「彰くん。いたの・・・」

庭から斗織が振り返る。こんな時の斗織りは、別人のように冴え冴えと大人びている。

「お勤め終わったの？斗織ちゃんは月見るの好きだね・・・」

夕刻の修練の帰りに斗織は、いつも中庭で月を見つめる癖があった。

「そうしていると、本当に巫女さんだね」

斗織は黙って廊下に上がり、彰の隣に立つ。

「果たさなければいけない約束があるの・・・それを果たすために私は強くなれないといけない。どうすれば強くなれるのかしら・・・」

そう言って、彰の腕の中にある八戒の頭をなでる。

八戒が来てから、斗織はよく八戒に話しかける。

八戒は静かにそれを聴いている・・・すべてを見通したような瞳を向けて・・・

「しばらくここでお世話になるんだ。よろしくね」

斗織は頷く。その事は祖父から聞いていた。

「遠慮しないで、自分の家とってくつろいでね」

彰に安息などありえないが、あえて斗織はそう言う。

「はっちーや、斗織ちゃんのおかげで寂しくなくなるかもね」

父は、ほとんど帰らず神社の宿直、母は彰が5歳のとき他界して家ではいつも一人……

それを思うと、ここは賑やかでいい。

「ウチは部屋が多いから、ずっといてもいいよ。悪夢にうなされるんなら、はっちーを貸してあげる。魔よけの黒猫様だから」

彰の腕の中の八戒は、彰を見上げる

「はっちー、僕のところで寝る？」

にゃあ……

「じゃあ、借りるよ」

「あ、私も貸してあげますが……」

はははははは……

斗織の言葉に思いっきりウケる彰。

「そのギャグ、今までで最高に面白いよ」

はあ……

「お休み」

去っていく彰の背中を見つめつつ、複雑な斗織。

同居……といっても広い家の中、間違いすら起こる気配は無い。

一緒に住むんだ～ ドキドキ…… そんな思いも微塵も無い。

とにかく、八戒はここでは一目置かれている。

ただの猫ではない事は一目瞭然。並々ならぬ霊力を感じる。

しかし、何者かなど詮索する必要も無い、する気も無い。

斗織には、はっちーは、はっちーなのだ。役に立とうが立つまいが、可愛い飼い猫。

それ以上でも、それ以下でもない。

……まあ……時々、変身させろ などと無理な事を要求をしたりもするが。

(その猫はまた、別の猫だってばよ～～～)

もとい

とにかく、訳ありな猫様である。

部屋に入り、布団を敷くと彰は机に向かう。

明日の授業の準備をすると、日記を書き、目覚ましをセットする。

枕元でうずくまっている八戒は、静かにそれを見つめている。

「君は、斗織ちゃんを守っているんだね・・・」

八戒に、そう言いつつ彰は布団に入ると、天井を見上げつつ、物思いに耽る。

こんな因果な身の上に、生まれたくて生まれたわけではない。

しかし、それだからこそ結ばれる絆もある。

八戒は彰に寄り添って眠る・・・

一月巫女をよこせー

一剣をよこせー

いつもと違う夢を見た。

斗織の父、^{しょうよう}逍遥が異形のもので戦い、母は幼い斗織を庇っていた。

(これは、おじさんが亡くなったあの夜の事だ・・・)

一目覚める前に、殺してしまえ・・・ー

闇の声はそう命じた。

自ら張った結界の外で、数千万の妖怪を倒して、逍遥は力尽き倒れた。

その瞬間、閃光の中、黒い翼の3本の足を持つ異形の鴉が現れる。

「八咫鴉・・・剣はそなたに預けた・・・」

逍遥から剣を受け取ると、それは強い光とともに消えた。

ーおのれ・・・日巫女の眷族・・・ー

ー闇老師、お前の負けだ。月巫女も氷月^{ひづき}も手には入らぬ。立ち去れー
若い女の声がした。

ー日巫女！またもや邪魔をするか！ー

ー今度会う時は、お前を倒すー

鴉・・・日巫女・・・剣・・・

彰は明け方に目覚めた。

先代の夕月神社の宮司である^{ゆづきしょうよう}夕月逍遥は斗織を守って死んだと聞いている。

そして・・・彰の母も、彼が5歳の時、彰を守って死んだ。

ふと、横の八戒を見ると、すやすやと安らかに眠っている・・・

闇のように黒い毛並みの猫は一瞬、黒い翼の鴉に見えた。

瞳は同じ緑・・・・・・・・

(はっちは・・・・・・・・もしかして・・・・・・・・)

この神社の御神体、^{ひづきのつるぎ}氷月の剣のありかは今は明かされていない。

神官たちは奪われたらしいと噂している。

それを・・・・・・・・持っているものがある。

日巫女の眷族・・・・・・・・

日巫女とは何者なのか・・・・・・・・

次の日の、学校の帰り道、一人で歩いていた斗織は尾行^{つけ}られていた。
異形のものには度々会う。珍しくは無いが、歩くたびに、どこからとも無く現れ
増えている。

(早く神社に帰らなくては・・・)
走りだした森の中、足をすくわれた。

—お前か・・・月巫女とは・・・—
しりもちをついた姿勢で囲まれて、斗織は後ずさる。
自分は、彰同様、狙われている。
日の巫女と月の巫女は対である。二人が出会うと闇は滅びるという予言があり
闇老子にとっては邪魔な存在だった。

だから・・・
節目節目に襲撃を受けてきた。
そして・・・今が最後の機会。斗織が18歳になる前に殺す事・・・
印を結んで自分に結界を張ると、斗織はあたりを見回す。敵の数が多すぎた。
(逃げるが勝ちか・・・)
力を消耗する事も得策ではない。
斗織自身、日巫女無しでは、月巫女としては未完成で、十分な力が発揮できない。
制服のポケットに手を入れると何かを取り出した・・・
一瞬、ほころびた結界に妖しは、なだれ込む—

たっ たっ たっ ・ ・ ・ ・
森の出口は神社の入り口。斗織は全力疾走で神社に向かう。
「アレ・・・どれだけでもつかなあ・・・」

結界の穴からなだれ込んだ妖し達は、自らが襲撃したモノが斗織の^{ひとがた}人形であった事を知ると、再
び彼女を追い始める。

「そんな事と思うたわ。小ざかしいのう」
黒づくめの覆面の男が目の前現れた。
どこかで聴いた声だったが思い出せない。
後ずさる斗織の後ろにすばやく回りこみ、男は斗織の首をつかむ。
「死ね」

瞬間、黒い影が斗織の顔をかすめた。

「うわああ・・・」

振り返ると、黒いマントの背の高い男が、覆面の男の腕を捻じ曲げていた。

「立ち去れ」

そして、追いかけてきた妖しを、手から気を発して跳ね飛ばした。

「・・・借りは返す」

そういい残して男は消えた。

「あの・・・」

斗織の声に振り向いた黒衣の男は、にっこり微笑んだ。

「お怪我はありませんか？」

「八戒！」

ありえない。それは限りなく、あの某漫画の腹黒キャラ、闘う眼鏡っ子だった。

「お前、自分の身も守れんでどうする。情けないのう・・・」

どこからか女の声がした・・・そう・・・頭上から・・・

ぎゃあ～～～

近くの大木を見上げた斗織は、腰を抜かした。

高い木の枝に腰掛けている巫女姿の女・・・

「まあ、ひとがた人形を使うたのは褒めてつかわす」

そう言って女は枝から飛び降りて、斗織の横に降り立った。

「お前が月巫女だな？」

年の頃は25、6・・・黒い長い髪を後ろで束ねた、瞳の大きな女だった。

「貴方は・・・誰ですか・・・」

ばしっ

いきなり頭をはたかれた。

え？

「たわけ者！！はるばる来てやったのに、誰ですかは無かろうが！！！」

え？？？

「これは・・・日巫女様。お久しゅうございます」

例の八戒が彼女の前にひれ伏した。

「おう、元気そうで何よりじゃ」

知っている仲らしい・・・というか・・・

「え？！！卑弥呼？」

再び斗織は巫女に頭をはたかれた。

「ばか者！日巫女じゃ！！！」

見ず知らずの巫女に2度もはたかれた斗織は、半泣きになっていた。

異形に追われ、某漫画の闘う眼鏡っ子に助けられ、初対面の巫女に頭をはたかれ、大混乱している斗織は、頭が真っ白になっていた・・・・・・・・

「さて、行くぞ」

巫女が歩き出すと、黒マントの男は黒猫に変身した。

え？！

その猫は・・・斗織の飼い猫はっちーだった。

「はっちー！！！」

「やかましい」

巫女は振り返ると叱った。

「今、人が猫に！！あの・・・ウチのはっちーに・・・」

「そやつは私の眷族じゃ。人でも猫でもない」

すたすたと神社に向かう巫女に、斗織は追いつく。

「じゃあ・・・何なんですか・・・」

「鴉じゃ」

はあ・・・・・・・・

「何で・・・容姿が八戒なんですか？」

「いちいちうるさいのう。お前のデザインであろう？」

・・・・・・・・

「八咫鴉は私の眷族だが、今はお前に貸してある故に、お前の思い通りの姿で現れるのじゃ」

そうなんですか・・・・・・・・

「八戒・・・か・・・名はようつけたのう。こやつは八つの戒めをその身に持つものなのだ」

「八つ・・・ですか・・・」

「汝、殺すなかれ、偽るなかれ、背くなかれ、盗むなかれ、憤るなかれ 驕るなかれ・・・あと
2つなんだったかな・・・・・・・・」

かなりアバウトな巫女に斗織は呆れる。

「忘れたんですか？・・・」

「千年以上生きてると忘れるのじゃ・・・こう・・・脳味噌からあふれ出すみたいなの・・・」

え・・・・・・・・千年以上・・・・・・・・

「おいくつなんですか？」

「女に歳を聞くな」

・・・・・・・・

「ところで・・・どこに向かっているんですか？」

「馬鹿者。お前の家だろうが。しばらく厄介になるぞ」

「はあ・・・」

「みっちり訓練してやるから、有難く思え」

ええ～～～～

「ああ、言い忘れたな。私の今の名は^{かみしろがづき}神城花月、お前には特別”師匠”と呼ばせてやるから、有難く思え」

いつから・・・いきなり師匠なんだ？

充分に怪しい神城花月・・・それでも日巫女。

すたすたと神社の敷地に入り、家の玄関の戸をあけている。

「松栄、おるか？私じゃ。」

しかも、宮司にえらそうな口をたたいている・・・

何者なんだ・・・・・・・・

出迎えた松栄に客室に通された花月は上座に座る。

「松栄・・・老けたのう、見違えたぞ」

松栄は大笑いしながら、花月に言う。

「日巫女様はお変わりありませんなあ・・・」

下座で小さくなっている斗織は、二人の会話をじっと聞いていた。

「しかし、松栄、そなたも大した腕じゃ、月巫女にこんなオオボケのコーティングを施すとは・・・誰もこんなボケが月巫女とは思うまい・・・」

はあ・・・松栄は苦笑する。

「確かに、孫の力を封じてはおりますが・・・その・・・ボケは・・・もともとでして・・・」

「何じゃと！！それはあんまりではないか！」

何があんまりなんだ・・・斗織は少しむかついていた。

そこへ、彰がお茶を運んできた

「日巫女様、彼が泰隆でございます」

松栄の言葉に、花月は彰を見つめる。

「陰陽の頭、安部泰隆か。なるほど、面影はあるのう・・・」

湯のみを受け取り、花月はちら、と斗織を見る。

「しかし・・・これが、宮様とは・・・おいたわしい」

(なに言ってるんだ!!!)

声無き反抗を繰り返す斗織。

「月子様は、それはお美しい聡明な姫じゃったがなあ・・・」

(知ったような口きいて・・・見たのかよ!)

「知っておるのだ。私は。当時、私は月子様の教育係をしておったのでな」
え？

「お前の思いはすべて読めるわ」

.....

気まずい沈黙があたりを包む.....

「しかし・・・まあ・・・泰隆を守ってきた功労は認める。やはり、今世でも愛しいか？」
えええ・・・げええ・・・斗織は真っ青になる。

(なんちゅう事を・・・)

「隠さずともよい。当時、二人は相思相愛の仲じゃったからのう。なあ？泰隆？」

彰は寂しく微笑んで頷く……

しかし、身分違いで叶う事のない恋だった。

一宮様……私は……貴方を……

離れてゆく指先に、迫る闇にかき消されて告げられなかった言葉……

「お前はやはり月巫女なのじゃなあ……」

その時の花月の笑顔を、斗織は懐かしいと思った。

一宮様、茶を運ばせましょうか……少し休まれたほうがよろしいでしょうー

筆を片手に微笑む齡25の女御……

彼女は星読みの能力を持つ巫女姫に仕える日輪ひのわ

月子の守り人であり、教育者であった。

「思い出したか？」

「そなたは……日輪……無事でなによりじゃ……」

斗織の口から、斗織の声ではない声もれた

花月の目にはその時、在りし日の女三宮 月子の姿を斗織にみた。

「月子様……」

その瞬間に、斗織は気を失って倒れた……

縁側に立ち、夜空を見つめている月子に、日輪はそっと近寄る。

「宮様、星を見ておいでですか・・・」

「禍星が現れた・・・」

日輪は瞳を伏せた。

「それは・・・」

みなぎ
「碧凧・・・」

行方知れずの日輪の双子の姉。月巫女・・・

日の巫女と月の巫女は同時に生まれ、一対であった。

しかし、7つの春に姉、碧凧は異形のものにさらわれた・・・

彼女を最期まで、守るために戦い、母は死んだ。

18才になるまで、月と日は同じ場所にいる事を禁じられていたため、日輪は男装して父の元にいた。陰陽寮の陰陽師たちにまぎれて・・・

「生きておりましたか・・・姉は。」

しかしそれは、姉との対決を意味する。

利用価値が無ければ殺されている。

生きているという事は、その力を利用されているという事。

おそらく、彼女は闇についた。もはや月の巫女の資格は失われている。

「宮様・・・」

運命は避けられない

「覚悟はできております」

月明かりに寂しげに笑う帝の末娘。女三宮・・・

「私は第2の月の巫女・・・碧凧の空白を埋めるべく生まれた・・・」

幼い頃から星を読み、未来を予知しては、父帝の政を支えていた月子は

特別な结界を施された部屋に住み、陰陽寮の特別警護の中、日輪の訓練を受け、霊力を育ててきた・・・

「私が生まれた時から決まっていた事です。」

月子が12歳の時に、日輪が教育係としてやってきた。

陰陽の頭の一人娘である彼女は、月子を守ると同時に、彼女を月の巫女として育て上げる使命をもっていた。

そして・・・

運命は動き出した・・・

「宮様、このたび就任した陰陽の頭が、ご挨拶に参りました」

ある日、日輪が御簾越しにそう言った。

「そなたの父は、退職したのか……」

「はい、体調を崩して病の床についております……新任の頭は、私の従弟に当たる者に
ございます」

「そうか……」

宮中では、若輩者が陰陽の頭に就任したと、もっぱらの噂になっていた。

しかし、その靈力は歴代最高といわれていた。

「泰隆、入れ。」

正装した若い青年が入ってきた。

闇のような漆黒の髪はつややかに光り、涼しげな瞳を伏せたその青年に

月子は息を呑んだ

いつか夢の中で会った青年にそっくりだった。

「このたび陰陽の頭に就任いたしました、^{あべのやすたか}安部泰隆 にごございます。」

額づくその青年の声は、月子を満たした。癒しの力を持つその声音は
月子を魅了する……

「帝によう使え、お勤めに励めますよう……」

「はい。恐れ入ります……」

その時、突然の風に御簾が舞い上がった。

普段、風などで揺らぐ事などない御簾が、泰隆の前でかすかに、一瞬、ひらめいた……

むやみに女人の顔を見ることは禁じられている。しかも相手は帝の末娘。

が……彼は一瞬、月子と見つめあった。瞬きするような短い瞬間に……

皇族の高貴な面立ちに、深い黒い瞳の第三皇女……

そしてゆっくり、その顔は再び御簾に隠された。

御簾が降りたとき、何事も無かったかのように二人は、別れの挨拶を交わして
別れた。

「泰隆……先ほどの事は……」

立ち去る泰隆を、日輪は廊下で呼び止める。

他言はならない。恐れ多くも宮様の顔を見たとあっては、ただでは済むまい。

いらぬ詮索をされてしまう……

「何か……ございましたか？私には何の事か判りかねますが……」

そうか・・・・・・・・日輪は微笑む。

「なら、よい」

これも定められた運命。二人は出会うべくして出会った。

そして、想いあう・・・しかし、報われない。

その結末は変えられない。

碧凧の空席を埋めるに、月子一人では力不足だった。補足要員として泰隆が呼ばれた。

二人はひとつになるために心を通わせる事になる。

そして、互いのために命を懸けるだろう・・・

そして、この戦は月子、泰隆、どちらかが死ぬことで終わりを告げる。

(知りつつも、どうにもならぬ・・・・・・・・)

日輪はため息をついた・・・・・・・・

「気がついたかい？」

長い眠りから目覚めると、そこには彰の顔があった。

「頭殿・・・」

安部泰隆・・・あの陰陽師の面影が消えない。

「やはり、そっちに行っておったか・・・」

彰の隣に座っている花月が、腕組みで頷いている。

「夢か・・・」

今、こうしてみると花月は、確かに日輪そっくりだ。

(本当にあれからずっと、死なずに生きてるの？この人・・・)

「お前・・・そういう目で見るとなよ・・・」

嫌そうな表情の花月を見て、斗織は彼女が人の思考を読む事を思い出して、渋い顔をした。

「そう嫌がるな・・・お前は私の弟子じゃないか」

(いつから・・・弟子・・・)

「斗織ちゃん、前世の記憶見て来た？」

見れば見るほど、泰隆にそっくりな彰の瞳・・・

「うん、泰隆と初めて出会った時の事」

彰は何度も夢に見た場面・・・

斗織のふとした表情に、月子を見るのが度々あったが、斗織は月子とは違う。

月子の持つ宿命の重さが無い。

背負った使命の重さは月子となんら変わらない。が斗織は明るい。

月子に無かった笑顔がある。泰隆が見たかった笑顔がある。

泰隆の脳裏に刻まれたのは、月子の泣き顔・・・

転生した彼女は、籠の鳥などではなく、自由に空を飛ぶ鳥なのだ。

月子は本当はこうして、のびのび生きてゆきたかったのかも知れない。

だから、彰は斗織の中の月子に”よかったね”とささやく。

そして気にかかるのは

一次は必ず、あなたを守りますー

そう言った月子の言葉。

それは、次は自分が犠牲になる という事ではないか・・・

しかし、斗織を見ていると、どんな運命も乗り越えられる気がする。

彰自身が斗織に支えられて、ここまで来れたように・・・

—彰君、過去は変えられないけど、未来は変えてゆけるから—

過去の夢にうなされていた幼い彰に、斗織は笑ってそう言った。

自分達は未来を切り開くために存在していると話す幼馴染は 遥かに大人びて見えた。

月子は泰隆を失い、一人、残りの生を生きた。何十年の長い月日の中で

ただ来世に希望を託して・・・

だから、斗織は彰を照らすことに余念が無い。

一人残された月子の年月分、斗織は彰を、より多く愛している。

「ずっと一人にして、ごめんね・・・」

愛するもののために死ぬ事より、愛するもののために生きる事の方が難しいのだと

過去の夢を渡りながら彰は 感じた。

「私は一人ではなかった・・・いつも、泰隆と共にいた・・・」

そうつぶやいた斗織の瞳は、あのときの月子の瞳と同じ色をしていた。

「昨日は斗織ちゃん、災難だったね」

放課後、彰と一緒に帰ろうと斗織の机の横までやってきた。

「災難というか・・・びっくりの洪水つか・・・」

はっちーが八戒になったり、日巫女が現れたり、前世の夢を見たり・・・

椅子から立ち上がり、斗織はカバンを抱える。

しかし・・・あの時、森の中でどこかで聴いた声がした。

若い男の声・・・

二人、教室を出て廊下を歩き出した。

「当分は一緒に行動したほうがいいよねえ・・・」

彰がそう言って、自分を心配してくれている事がうれしい。

「ありがとう～彰君」

彰にとって、誰にも言えない事情を分かち合えるのは、やはり斗織しかいない。

「ねえ、彰君も がっかりした？美しい月子様の生まれ変わりがこんな私で」

彰は泰隆の面影を宿しているのに、自分は似ても似つかないのが引け目を感じる。

「日巫女様の言う事、気にしなくて良いよ。斗織ちゃんは斗織ちゃんだから」

そうなのだ・・・

斗織は月子ではなく、彰は泰隆でない。

だから二人は想いあう仲でもない。そういうものだ。

「そうだよね。私達は何でもないよね・・・でも、私は彰君を守るよ。約束だから・・・」

「約束だから・・・それだけ？」

反則な笑顔で、彰は斗織の顔を覗き込む。

「私は、今世でも彰君が大事だから・・・」

もし、このすべてのもつれた糸が解けて、前世から開放されたら、斗織と初めて向き合える、そんな気がした。

だから、今は斗織の想いに答えることはできない。

校庭を突き抜けて、校門に向かって歩いてゆくと、校門に一人の女の姿が見える
遠目でも誰だか斗織には、すぐわかった。

黒いスーツの、背の高いシルエット、ショートボブの黒髪・・・

「お姉様・・・」

その言葉に彰は首をかしげる。

「斗織ちゃん・・・お姉さんいたの？」

その女も斗織を見つけると、かけていたサングラスを外して呼んだ。

「斗織、私の車で一緒に帰りましょう」

「御姉様、お越しでしたの？」

彰には、この女が誰なのかさっぱりわからないまま、斗織の後をついて行った。

「何かあったわね？ うちにある貴女の^{ひとがた}人形が、昨日、いきなり粉々になったのよ」

潮音の自家用車の後部座席に3人、並んで座ると、彼女はそう言った。

^{まちもりしおね}

街森潮音・・・彼女は大学生の身でありながら、有名な人形作家である。

彼女の作る西洋人形は”ニア・コレクション”としてフランス、ドイツでも有名で高価な値がつけられている。

しかし、彼女の本業は日本人形。

平安時代、陰陽師に仕えた^{ひとがた}人形作りの一族である檜山の血をひいていて

檜山の現当主である、11代檜山夢幻斎の従妹に当たる。

分家の娘でありながら、当主に匹敵するほどの能力者で、歴代当主の中でただ一人女の身で檜山夢幻斎を継承したという、伝説の紅薔薇の巫女、檜山ミサの転生と噂されていた。

容姿もミサと瓜二つで、キリスト教に関心を持ち、ミサの実家である^{くるすけ}来栖家とも交流を持ち、中学からは来栖家が代々祭司を務めているセント・ローザン教団の学院に通っていた。

現在セント・ローザン女学院付属の大学に籍を置いている。

「昨日、襲われましたが、はっちーと日巫女様のおかげで無事でした」

「日巫女様がこられたのね」

もう決戦の時は迫っている・・・

「そちらが、泰隆公の？」

と、潮音は斗織の隣の彰を見る。

「ああ・・・噂の彰君です」

「初めまして、石田彰と申します・・・」

「街森潮音です。斗織とは、セント・ローザン女学院でスールだったのよ」

はあ・・・

中学生のときに、自分が山奥の田舎に隠されていた時、斗織はいきなり祖父の受けた啓示により、カトリックのお嬢様学校に送られたという事は聞いていたが・・・その時、知り合った先輩らしい・・・

「スールって・・・」

「義理の姉妹ね。上級生が下級生にロザリオを渡して、姉妹の契りを交わすのだけど・・・」

潮音は思い出し笑いをした・・・

「お姉様！」

斗織は渋い顔をする。

「斗織は私の落としたロザリオを拾って、私とスールになったのよ……」

「お姉様！！」

完全無欠で、何の落ち度もない人生を送ってきた潮音はあの時、とんでもない落し物をしてしまい、斗織と出会う事になった。

しかし、それも運命。

あの事件の前、当主夢幻斎は予言したのだ。

—お前が守るべき宿命の巫女は、お前の落し物を拾うだろう—

と……………

中学進学するとき、祖父、松栄は突然カトリックの女学院に斗織を転入させた・・・

セント・ローザン女学院の中等部・・・

神社の宮司の孫娘が行くところではないだろうに・・・

斗織は肩身の狭い学園生活を送っていた。

しかも・・・

そこには、薔薇様方がいる。お嬢様の空間・・・

紅薔薇 白薔薇、黄薔薇・・・各種そろっておいでだった。

彼女達は生徒会の役員で全校生の憧れの的。

ついて行けないものを感じつつ、斗織は今日も登校する・・・

「ごきげんよう・・・」

美しい笑顔の上級生がやってきた。

噂のクール・ビューティ、紅薔薇様・・・風に舞う黒髪、切れ長の瞳・・・

ついていけないながらも斗織は密かに憧れていた。

「ごきげんよう・・・ロサ・キネンシス・・・」

紅薔薇 ロサ・キネンシス

白薔薇 ロサ・ギガンティア

黄薔薇 ロサ・フェティダ

この舌を噛みそうな呼称の中で、唯一すらすら言えたのがこのロサ・キネンシス。

入学したときから憧れていた。心の中で何度も繰り返した・・・

もし、どこかですれ違えば挨拶したいと。しかし、至福の時間は長くは無い。

瞬きする間に、憧れの紅薔薇は通り過ぎていった。

一人佇む校庭の正面にあるマリア像の前。

「あら・・・」

マリア像の大理石の足元に何かが落ちていた。

「これは、ロザリオだわ」

ここに来てからよく見かける、キリスト教の数珠のようなもの・・・

お祈りする時に皆使っている。

薔薇色の玉が繋がられていて、トップはメダイ・・・手に取るとほんのり薔薇の香りがした。

そして確信した。これはロサ・キネンシスの落とし物だと・・・

「潮音さん、もう3年生になったのだから、いい加減、妹をお作りになってはいかが？」
薔薇の館と呼ばれる生徒会室で、黄薔薇の南川利香が心配そうに言う。

学園のしきたりで、薔薇様は後継者としての妹、スールを持たなければならない。
今、生徒会では紅薔薇の後継者である、ロサ・キネンシス・アン・ブットンだけが
空席なのだ。

「利香さん、心配かけてごめんなさいね・・・人見知りなためか、なかなか親しい
下級生が見つからなくて・・・」

（人見知り・・・ね）

利香は苦笑する。

潮音は、あまり人に関心を持たない。

クールすぎて、誰も近寄れない孤高の存在なのだ。

高等部に上がった、潮音のグラン・スールも高貴な女生徒だったが潮音に一目ぼれ
して、ベタベタに溺愛していた。

「紅薔薇は、代々クールなのね・・・」

そんな利香の言葉に、ため息をつき、潮音は椅子に腰掛ける。

「でも困ったわ・・・このままお姉様からいただいたロザリオを、誰にも渡せない
となると・・・とって、誰でもいい訳でもないし・・・」

とカバンを開ける。

「？」

無い。カバンの内ポケットに入れてあったロザリオが・・・

（ああ、そうだわ、朝、マリア像の前でお祈りした時出した・・・）

そして、手にかけて・・・手首にもそれは無かった。

（大変だわ、失くすなんて・・・どうしましょう・・・）

イタリア製の、薔薇の花びらを圧縮した玉をつなげてつくったロザリオは潮音の
グラン・スールからもらった姉妹の証。

誰かに拾われてロサ・キネンシス・アン・ブットン（紅薔薇の蕾）を名乗られても
困る。

それでなくても、今現在、空席の紅薔薇の妹を、皆が虎視眈々と狙っているというのに・・・

そこへ、少し毛色のちがった1年生が戸を開けて入ってきた。

「ロサ・キネンシス・・・お渡しするものがございます・・・」

あまりにも素朴なたたずまいの中に、秘められた力が見え隠れする・・・

—ただものじゃない・・・—

なぜか魅かれた、それよりも何よりも、手にしているものは潮音のロザリオ……

「あ……ああ……温室に行きましょう。」

あわてて立ち上がると、斗織の腕を取って潮音は温室に向かった。

「これ……ロサ・キネンシスのロザリオですよね……」

温室に入ると斗織はロザリオを差し出す

「ありがとう、探していたのよ。私もドジね。こんな大切なものを落とすなんて」

ロザリオを受け取る時、潮音の指が熱を感じた。ロザリオが斗織に反応している

「潮音さん、もうすぐ運命の巫女に出会いますよ。」

当主である夢幻斎に頼まれた、人形のパーツを自宅に持っていった時、夢幻斎は潮音にそう言った

「貴女の落し物を拾った子が、その巫女ですから、見逃さないでくださいね」

数日前の夢幻斎の言葉が脳裏に浮かぶ

「貴女……お名前は？」

「1年B組の夕月斗織です」

「そう、斗織。ロザリオを受け取ってくれますか？」

「え？」

頭が混乱していた……

ロザリオを受け取るとは……妹になる事……

(どうして私なんか?)

次の朝から、斗織は話題の人になってしまった。

—あの人よ・・・紅薔薇の妹になった人—

そういつて皆振り返る・・・

2年生には、辞退しろと脅迫してくる者もいた・・・

薔薇の館で、白薔薇の池上忍が、心配して潮音に耳打ちした。

「潮音さん・・・皆が納得していないようですが・・・」

それは白薔薇、黄薔薇も同じ事。

今の今まで勿体ぶっておいて、突然あまりに庶民的な、地味でおとぼけた1年生を妹にしたのだから・・・

「斗織のどこが、納得がいかないというの？」

潮音は立ち上がると1年B組の教室に向かう。

案の定、2年生、1年生双方に絡まれている斗織の姿があった・・・

「皆様、私の妹に何か御用かしら？」

突然現われた、凜とした美しい紅薔薇に皆我を忘れる。

「ロサ・キネンシス、私は納得がいきません。彼女の家は神社です。

セント・ローザンに籍を置く事さえ、はばかれるのにロサ・キネンシス・アン・ブウトンなんてゆるせません」

妹候補と噂されていた、2年の山瀬友里恵が抗議してきた。

「宗教裁判でも開くおつもりですか？彼女は学長の許可を得て、ここに入学してきたのですよ。」

「でも、なぜ、この子なのか、お聞かせください」

「貴女のような俗物ではないからです。第一、紅薔薇の後継者を狙っている貴女たちにはロザリオは渡せないわ。」

静かな口調の中に厳しさが垣間見えた

「覚えておきなさい、斗織を敵視するものは私の敵です。容赦しません、それに私は馬鹿ではないのよ、判断を誤る事などありえないわ」

騒ぎの渦中にいた斗織は、自分の境遇そっちのけで、潮音の気高さに見とれていた。

「斗織、薔薇の館にいらっしやい、これから、お昼はそこで私といただくのよ」

歩き出す潮音の後をとぼとぼと斗織りは付いてゆく・・・

だんだん自分が情けなくて、申し訳なくて、いたたまれなくなる・・・

「あのう・・・」

「気にしなくて良いのよ。あんな人たちばかりだから、今まで選べなかったのよ」

そうって差し出された手にそっと自分の手を重ねる。

「貴女は私の運命の巫女なのよ。もっと堂々としていて」

運命の巫女・・・・・・・・

あの日、断っても無理矢理渡されたロザリオを持ち帰り、祖父に見せたたん
松栄は微笑んだのだ。

一 出会うたか・・・・・・・・お前の眷族に一

月巫女の^{ひとがた}人形を作る人形師が、セント・ローザンにいるという啓示のもと、彼は
斗織をそこに送ったのだ・・・・・・・・

(潮音様が私の眷族?)

「私は月の巫女に仕える眷属として生まれた。斗織とスールになるのは運命でしょう？」
二人は廊下を歩きつつ、薔薇の館に向う。

「でも、わざわざ、妹になる事はないんじゃないですか・・・」
学校のしきたりと、自分自身の役目は連結させなくてもいいような気がした。

「でも、妹以外の下級生とは親しくできないのよ・・・それに、適当に妹を選ぶなんて私には無理だし・・・」

「そんな・・・お姉様に気に入られるところなんて、私には無いと思うんですが・・・」
薔薇の館の戸を開けて、潮音は中に入り、お茶の準備をする・・・

「貴女は、少なくともあの子達のように虚勢をはったりしないじゃない？
傲慢な人は嫌いなものよ、私。気高い事と、傲慢な事は似ているけど全然ちがうのよ」
そう言って潮音は、斗織に椅子に腰掛けるよう勧めた。

「学長様にお願いして、調べさせてもらったの貴女のお家の事、だから確信したのよ。貴女が月の巫女だって・・・私の母の実家は檜山なのよ」

「檜山夢幻斎の檜山ですか？」

ふふ・・・

潮音は笑った。やはり知っている・・・

「代々陰陽師に仕えた、^{ひとがた}人形 づくりの一族ね。平安時代に、安部泰隆公にも仕えていたわ。」

安部泰隆・・・斗織はふと顔を上げる。

「月巫女が現れたという事は、泰隆公も・・・」

ポットとカップをトレイにのせて、潮音はテーブルにつく。

「私の幼馴染です。今は身を隠していて、ここにはいません」
生まれてから一度も離れて暮らした事が無かったのに、今は山奥にいる彰・・・
「いつか会いたいわ・・・」

それから、潮音は高等部に進学し、斗織は中学卒業と同時に、再び彰と同じ高校に入学した。

「今思えば、セント・ローザンには、お姉様に会うために行ったようなものですよね・・・」

潮音と並んで車に揺られつつ、斗織は懐かしい日々に思いをはせる。

「そうね、でも斗織には、つらい日々だったかしら・・・」

「そんな事・・・私だって、栄えあるロサ・キネンシスなんですよ～！！」

ふふふ・・・

潮音の卒業後、斗織は親しみやすい雰囲気です立派に生徒会を率いてきた。

それは彼女も認めている

「そうじゃなくて、彰君と離れていた事……」

「お姉様～!!!」

ちょうどその時、車が止まり、神社に着いた。

3人は車を降りて家に入る。

「客室でお待ちください。お茶をお持ちいたします。彰君、ご案内してくれる？」

頷いて彰は潮音に笑いかける。

「こちらです」

客室のソファーに腰掛けると、潮音は改めて彰を見る。

「斗織が話していた通りね。」

何度も聞かされた"片思いの君"の話・・・つややかな黒髪の涼しげな瞳の美少年・・・恋した欲目で、話半分に聞いていたが、まさか、そのままの姿で現れるとは・・・

「斗織ちゃんが何か？」

「幼馴染に美少年がいるって・・・」

彰はあきれろ。

「誰ですか・・・それ・・・」

照れるところも可愛い。

「ところで、潮音さんは術者ですね」

「判る？」

「気を感じます」

そうだろう。そうでなければ泰隆の転生ではない。

「私は檜山夢幻斎の従妹にあたるの。人形作家だけど、本業はひとがた人形なの」

「では、斗織ちゃんの携帯している小さな人形は・・・」

「私の作ったひとがた人形のミニチュア。本体は私の家にあるわ。私は月巫女の守護者としての使命を担って生まれた。本家の当主でもないのに、能力を授かったのは、その為ね」

微笑む彼女に、孤独の影が見える。

「その能力の為に、いろんな思いを通過されたのではありませんか？生まれた事を悔やんだ事はありませんか？」

潮音は、目の前の少年を見つめる。

洞察力は鋭い。そして情に関して敏感である。

「使命や宿命は重いわね。でも、そのおかげで私は斗織と出会えた。

あの子といるとね、未来が見えるの。明るい未来が。肩の力が抜けて、とっても楽になれる。不思議な子でしょう」

ふっ・・・彰は笑う。

自分も、そう感じていたから・・・

「少なくとも、彰君は孤独ではなかったでしょう？斗織がいつも傍にいたんだから」
そう、斗織がいなかったら、こんなに穏やかに暮らしてはいないだろう。

「ねえ、彰君。斗織は前世とか関係なく、君が好きだわ。泰隆公のことも引きずっていない。石田彰と言う幼馴染を見つめている。君は、どうかしら？」

僕は・・・

判らない。夢の中の月子と、現実の斗織の狭間で揺れ動く自分がある。

これは自分の思いなのか、泰隆の思いなのか区別がつかない。

「君は、繊細で色々な感情が混ざり合っていて、複雑なのね。でも、これは確かよ。

君は泰隆公ではない。石田彰だってこと。」

その当然の事に、彰は衝撃を受ける。どこかで引きずってきた前世・・・

自分が何者かわからなくなってくる日々・・・

その中で、斗織は今の自分だけを見つめてきたと言うのだ・・・

「そうか・・・僕は、馬鹿ですね」

そんな事さえ気づかないほど、自分だけに一生懸命だった。

「何のお話ですか？」

紅茶のカップをトレイにのせて、斗織は現れた。

「なんでもなくてよ。斗織が彰君にベタぼれしているというお話よ」

「お姉様・・・いい加減にしてください」

「まさか、こんな美少年とは思わなかったけど」

と自分のカップを受け取る。

「ところで、御用があったのでは？」

自分も席に着きながら、斗織は思い出したように訊く。

「ああ。そうそう、^{ひとがた}人形のミニチュア補充しておかないと、と思って・・・」

絵の具箱のような大きさの桐の箱を、思い出したように潮音は取り出した。

「切らしたら私が伺いますから・・・」

「だけど・・・驚いたのよ、ほんと。粉々になったのは初めての事だから。大事はなさそうだったんで、今日様子を見に来ただけど」

そう言って、飲んでいたカップを置くと潮音は苦笑した。

「家にある^{ひとがた}人形も、近いうちにグレードアップさせるわね」

スペアはいくつも作ってあるらしい・・・

「潮音が来ていると聞いたが・・・」

しばらくして、巫女服の花月が入ってきた。

「これは・・・日巫女様・・・」

潮音は立ちあがると頭を下げる。

「堅苦しい挨拶はするな・・・つーか、大きゅうなったのう・・・」

「お知り合いでしたか」

斗織には初耳だった。

「小さい頃に、先代の夢幻齋様のところに来られた時に・・・」

「当時お前は5歳だったか？」

「日巫女様は、お変わりありませんわねえ・・・」

千年以上生きている妖怪のようなものなのだから・・・と斗織は苦笑する。

「おい、弟子、師匠を妖怪呼ばわりするな！」

彰は、そんなやり取りに笑いが止まらない。

日輪は男装して育ったため、男勝りだった。誰よりも潔く、男らしい・・・

夢で会った彼女はそんな女御だった。

「夢幻齋も代替わりしたのだろう？」

「はい」

「皆すぐ老けて、死ぬからつまらぬ」

(つか・・・どんだけ生きてら気が済むんだ・・・)

「おい弟子！」

心で突っ込んだのがバレバレで、しかられる斗織・・・

「まあ、お前がサポートしてくれるのなら心強い。弟子もこれから特訓して立派な巫女にしてやろうぞ・・・」

ははははは・・・

(いや・・・その笑い怖いつて・・・)

思ったより顔の広い花月に驚きつつ、斗織は先行きを案じていた・・・

しばらくして、手のあいた松栄が挨拶に来た。

「潮音様・・・いらっしゃいませ」

潮音は立ち上がって挨拶をする。

「宮司様、ご無沙汰しております」

「お座りください。有名な人形作家様がお越しとは光栄です」

笑いつつ席につく。

「ご無沙汰しております。日巫女様がお越しだった事も知らないままおりました」

「そうか？なにか勘づいて来たのではなかったのか？」

それはあるけれど・・・花月の言葉に潮音は苦笑する。

「斗織もよい保護者を持ってしあわせじゃな」

松栄は予言の、この人形師を気に入っている。

学園生活を共にしただけあって、潮音と斗織は互いをよく知っている。

食の好み、シュミ、行動パターン、互いの癖・・・シンクロ率が高いほど、団結も強くなるというもの・・・

とっさに判断を誤る事も少なくなる。

だから彰と斗織は、なるべく共にいるように指示されていた。

申し合わせたように、同じ日に生まれた二人は、ずっと一緒に育った。

他の子供とは違う、使命と宿命を背負った二人は、それでも前向きに不平不満を言うことなく、頑張ってきた。

斗織が明るいのが支えだった。

彰のために、ひたすら天然であり続けようとしたのかもしれない。

「ちゃんと私が鍛えて、実戦に備えてやるから安心しなさい」

日巫女は、明日からの月巫女修行の為、準備しているらしい。

「日巫女様が来られたのなら安心ね」

潮音は微笑むが、斗織は怯えている。

「斗織の身代わり人形と、彰君の分も、そろそろ作っておいたほうがいいわね」

「お世話になります・・・」

彰が頭を下げる。

「いいのよ、彰君の事は当主に、よくお仕えするように申し渡されていますから・・・」

檜山夢幻斎・・・

泰隆に仕えていた人形師。

代々その名を受け継いで今に至る。

夢幻齋襲名と同時に、自分の名を捨て、夢幻齋を名乗る。

今の夢幻齋は、もちろんあの頃の夢幻齋では無い。

「そうですか・・・御当主には、よろしくお伝えください」

しかし、どこか懐かしい感じがした。

夢で見た、まだ幼さの残るあどけない夢幻齋の姿が、脳裏に浮かぶ。

施術中の冷徹な面持ちは、ぞっとするほどであったが・・・

前世の記憶は彰には、苦痛で、つらく悲しかった。

自分でさえそうなのに、悠久の時を生き抜いてきた花月は、どれほどの孤独と

苦痛を耐えてきただろう・・・

彰には、彼女の強がりも、空元気のように思えてならなかった。

「さて・・・まず準備体操からいくぞ」

学校から帰るなり、斗織はいきなり裏の竹林で花月の訓練を受ける事になる。

「・・・準備体操で・・・なんすか・・・」

巫女の修行に、準備体操が必要なのか・・・

「何事にも準備体操が必要だろう？基本だ」

と持ってきたラジカセから、ラジオ体操の第1を流しはじめた。

一抹の疑問を感じつつ、一応、師の言うとおりにする。

「よろしい、では瞑想してみようか・・・」

瞑想はわからなくはない。精神統一のため必要だろう・・・

「では・・・そろそろ、かめはめ波とか出してみようか～」

あまりに当たり前に言われて、斗織は一瞬うなづいてしまった・・・

が・・・

「え？何を出すんですか？」

「かめはめ波・・・知らんのか？ほら、有名な漫画で、山一つぶっ飛ばすあれ・・・」

（師匠・・・イカれてる・・・）

「何だと！師匠の言う事が聞けないというのか！」

「アレは漫画ですし・・・」

「ばか者！孫悟空にできて、お前にできない事など無いのだ！！」

（なんで？私サイア人でも、亀仙人でも無いし・・・）

はああ・・・

花月はため息をつく。

「月子様はできたのになあ・・・」

(嘘だろ！)

そんな宮様なんて聞いた事ない。

「まあ・・・やってみろよ。かめはめ波とか言うから嘘っぽいだけで、手から気を出す気功法とかあるだろ？アレの一種だから・・・」

そういわれると出来そうな気がした。

「判りました・・・」

「足踏ん張れ！手のひらに意識集中させろ！」

言われるとおりに構えると斗織は思いっきり力をこめた

「か～～～め～～～は～～～め～～～はああああ～～～」

.....

「師匠・・・出ません・・・」

「出る訳ないだろう～馬鹿か・・・お前」

さっきと、うって変わった態度に斗織は啞然とする。

「え・・・」

「お前、中2病か？銀さんとおんなじレベルだな～」

「銀さんて誰すか・・・」

「万事屋の銀さんだよ」

.....

斗織は半泣きになっていた。

師匠だと思って崇めていた自分が馬鹿だった事に気づく。

これじゃ、ただのアニメオタクではないか・・・

(自分もだけど・・・)

「まあ・・・お前が素直なのはわかった。ああ～面白かった～彰にも見せたかったな～」

(やめてください)

性格はハチャメチャでも一応師匠。日巫女で、不死身の不老不死だから信じたのに・・・

(騙された・・・)

「その調子で頑張れ～」

(どの調子だよ・・・)

やる気が極端にうせた斗織は、ため息をつく。

「落ち込むな、さっきのはテストしたまでの事。」

「天然度ですか・・・」

「私とお前の信頼度だ」

(いやもう、信じられなくなりましたけど?)

「お前は信じやすいから、自分や味方に対する信頼度は高い。が・・・

敵に惑わされやすく、暗示にかかりやすいという欠点がある。そういうところを

訓練して直して行くのだ」

うまくまとまると、花月は満足顔だった。

「そうですか・・・」

(単に、私で遊んだんじゃないんですか?)

訓練第一日目に、斗織は師匠不信に陥った。

次の朝、斗織と彰は学校に向かう。

今日も、あのわけのわからない修行が待っていると思うと、朝から気が重い。

「斗織ちゃん、昨日は大変だったね・・・でも、きっと日巫女さんの事だから何か考えがあつてのことだと思うよ。落ち込まないでね」

昨夜、花月は彰にフォローを頼んでいた。

「うん。根に持つようなタイプじゃ、私無いし～大丈夫～でも・・・今日もああたとガラスのハートが粉々かも・・・」

「いつも斗織ちゃんに励まされているから、時には僕も力になりたいな」

「ありがとう、彰君は存在だけで、十分に私的萌えだから～」

「おいおい・・・またそんな事言って～」

照れてるところがまた斗織のツボに入る・・・

「おい。お前達・・・なんで一緒に登校してんだ？」

校門までたどり着いた頃、後ろから声がした。

振り返るとクラスメイトの保志総一郎がいた。

「あ、保志慎一郎くん・・・」

「総一郎だよ・・・いい加減覚えろよ～石田～」

なぜか彰は保志総一郎の名前をいつも間違える。

「おはよう・・・保志君。」

斗織も挨拶をする。が、いつもスルーされている。

なぜか彼は彰にしか関心が無い。

「まさかお前ら・・・同棲してんじゃないだろうな～」

(同棲・・・同居と言ってよ・・・)

心で突っ込む斗織。

「家が近所だからさ」

「ふうん・・・それでお前、こんなしょうもない女とくっついてるの？彼女できね一ぞ？」

(しょうもない！？保志～！！どつくぞお前！)

斗織をスルーしている割には、斗織の反応を見て楽しんでいる総一郎。

「彼女なんて、別にいらんし・・・斗織ちゃんは、僕の大事な幼馴染だから」

まじめに答えている彰。

なぜか斗織には、この総一郎が胡散臭く思えてならない。

「え～？もしかしてお前・・・あっち？だから女に興味ないの？」

「保志君、面白いギャグだね～そういう保志くんも、モテるのに彼女作らないの？」

彰はひたすら感情を表に出さない。しかし会話を操りつつ何か探っている。

「俺？俺は～本命がいるんだ。いつかゲットする」

「ふうん……」

興味がない彰は、そのまま斗織と教室に入ろうとした。

総一郎はその彰の腕をつかむ。

「誰だか知りたくねえか？」

「別に……」

「お前だよ」

「無理です」

即答されて固まる総一郎。何も無かったように席に着く彰。

はあああああ～！！！！

なにiiiiiiiiiiii！！！！なんやてえ????

斗織は心中、大パニックを起こしていた。

「斗織ちゃん・・・」

昼食時間、箸を手にしたまま斗織は考え込んでいる。

「斗織ちゃん！」

向かいに座って弁当箱を開いた彰は、何度も彼女を呼ぶ。

「あ、ごめん・・・」

「何ぼ一としてるの？」

他でもない、今朝の総一郎の問題発言である。

「保志君てさあ・・・」

ああ・・・彰はうなづく。

「保志慎一郎には気をつけたほうがいい」

彰君・・・また名前間違ってるよ・・・どうして彰は総一郎の名前を間違えるのか・・・

「背後に黒い影が見えるんだ・・・」

え？

「あいつと話すとき、自然に防御モードに入っていくんだ・・・本能的に」

彰の受けた訓練は、自己防御。

潜在意識が危険と察知したら、自然に自己の能力も気も中に向かう

もしかして・・・それで彰は総一郎の名前を間違えるのか？

今朝の会話も・・・

「今朝さあ・・・保志君が彰君の事、本命だって・・・」

「え？なにそれ？」

やはり記憶に無い。

あのときの彰は自分をオフった状態だったのだ・・・

「ううん、なんでもない」

確かに・・・彰から「無理です」という言葉が出たということはオフの証。

オフの彰は「無理です」を連発するのだ・・・

それでなくても、気にかかる。

何か重要な事を見落としている気がしてならない。

「師匠・・・クラスに気になる男子がいるんですが・・・」

今日は斗織の部屋で机を挟んでの授業である。

「おい・・・お前、彰というものがありながら、他の男に目移りか？」

「意味が違います！」

「では・・・敵か？」

「かもしれませんが、何か見過ごしている気がして・・・」

心む・・・花月は腕を組んで考える

「それに、今朝そいつ、彰君に”お前が本命だ”とか”いつかゲットする”とか言うんですよ～怪しいでしょう？」

「彰はそっちなのか？」

師匠・・・・・・・・

自分と似た思考回路を持つ師匠に、不安を感じる。

「師匠？もしかして、頭に腐とかつきます？」

「私か？失礼な！私は真ん中じゃ！」

へえ・・・・・・・・????

「真ん中に腐がつく 貴腐人じゃ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

いや・・・それ・・・自慢ですか？

「それはそうと・・・そいつの名前は？クラスで撮った写真とかあるか？」

「保志総一郎・・・です」

そうやって斗織はアルバムから総一郎の写真を探す。

「彼です。ほら、私と彰君の後ろに小さく写ってる・・・」

ツーショットの邪魔物のように総一郎はいた・・・

「判った、後で監視の式を飛ばしておく」

「顔と名前だけで、見ず知らずの人に式神送れるんですか？」

「私は日巫女じゃ。出来ない事などない！」

「もしかして・・・黒い表紙のノートとかもってます？名前書いて人殺せるやつ」

花月は呆れた目を斗織に向ける。

「ノートで呪いとは原始的じゃないか？」

(いえ・・・式神も、なんか埃かぶってませんか？)

「とにかく、彰に付きまとっているという事だけでも怪しい。女じゃなくて男が・・・だ。」

「でも、保志君、私のことは無視します」

「それは問題ない」

え・・・・・・・・

「とにかく、今日の授業は・・・そう、修行でなくて授業だ。授業はだな・・・他ならぬ氷月の剣についてだ」

氷月・・・

この神社の御神体の剣で、昔、斗織の父が氷月で戦い、敗れて後、現在行方不明とされている。

「ご存知なのですか・・・御神体のありかを？」

「馬鹿か・・・お前。御神体がどこにあるのか、わからんのか？」

「判るはず無いでしょう？」

花月は呆れて声も出ない。

「見ておったろうが！！！」

確かに、父 逍遙は氷月の剣で戦い、敗れて亡くなった・・・
が・・・

その後、どこにも、その剣は見当たらない

「え?! どうして日巫女様、それを・・・」

「私も見ておった」

「いなかったじゃないですか! あそこには」

「神鏡に映して見ていたのじゃ」

そういえば・・・あの時間こえた女の声・・・

あれが日巫女・・・

「まだ判らぬのか・・・お前、本当に月巫女か？」

「あ、そういえば・・・黒い影のようなものが現れて・・・」

「八咫鴉じゃ、私がよこした。もしもの時は氷月を預かる事になっていたからのう」

父が息絶える直後に、氷月を八咫鴉に預けた・・・

すると・・・

「今までこやつが氷月を所持しておったのじゃ」

と花月は自らの膝の上に座っている、はっちーを指さす。

ずっと、御神体はこの神社にあった・・・

「これはA級機密じゃ、誰にも言うな。この事はお前と彰しか知らぬ。

松栄は感づいてはおるだろうがのう」

「彰君も・・・」

「彰は恐らく夢で見ている」

確かに・・・敵は斗織を狙っていた・・・氷月の剣をよこせと・・・

斗織が持っていると思っているらしい。

「氷月の剣は月巫女の証。これがのうては月巫女とはなれぬ。それゆえにお前の父も
母も剣を守ってきたのじゃ」

しかし・・・

おかしい・・・斗織には氷月の剣の記憶が無い。

神社に代々受け継がれてきた御神体なら、目にしないはずは無いだろうに・・・

父が剣を携えて闘っていたときも、なぜかそれは漠然としていた……

「質問があります～氷月の剣はどんな形をしていますか？」

バコッ

こぶしで花月に一撃を食らった。

「ばか者！剣だから細長くて尖っているに決まっておろう！」

「いえ……どんなデザインなんですか……」

と紙と鉛筆を差し出す斗織に、花月はもう一撃加える。

「阿呆！氷月の剣は物質ではない！人体と同じ成分で出来ておるのじゃ」

はあ……

訳が判らない斗織は固まってしまった……

「まったく……オオボケにも程がある……平安時代から今まで存在する剣など普通に考えて、ないだろうが……」

いや……

平安時代から今まで生き続けている人間も、普通に考えていないかと……

剣の謎は深まるばかりだった。

午後の音楽の授業のため、音楽室に向かう斗織に、彰は声をかける。

「今日は、いつもにもまして大変そうだね」

うん・・・

花月が現れてからというもの大変でない日など一日も無かった。

が・・・

最近の修行はかなりきつい。ほとんど我慢大会のようなものだ。

精神と肉体に拷問をかける日々・・・

これがなんになる・・・といたいところだが・・・

—まず、18歳になったらお前は、はっちーから氷月を継承する。

そのときミンチにならないように実力をつけろ。そして、氷月を使えるものとなる訓練も同時にする—

—ミンチ・・・ですか・・・—

—ああ、人体と同じ成分で出来ているとはいえ、一応刀だ。斬れる訳だ、そんなものを体内に入れてみる？使いこなせなければバラバラ死体まっしぐら・・・—

—で・・・体内の剣をどうやって取り出すんですか？—

—いい質問だ。さて、どこから出したい？—

そんな事言われても・・・斗織は答えに困る

—口から出すのも変だし・・・昔、胸の辺りから剣が出るアニメみたような・・・—

花月はため息をつく・・・

—世界を革命するわけじゃないんだから・・・つーか・・・口から剣出したらイロモノじゃないか？—

う~~~~ん

長い沈黙の後、花月の一撃が飛んだ。

—あほ！すぐ戦闘体制に入るためには、やはりあそこだろ—

—どこ・・・—

ぼこっ

二発目が飛ぶ・・・

—手だろ！手—

なるほど・・・うなづく斗織

—その前ふりが、かめはめ波だったのじゃ—

満足そうにうなづく花月。

.....
.

「彰君・・・手から剣出す訓練で・・・なんか人離れしてるよねえ・・・」

「でも、泰明公も、斗織ちゃんのお父さんも右手から剣を出していたよ」

夢で見たらしい。

何故、斗織はあの時の事を覚えていないのか？祖父 松栄に記憶まで封印されているのか？

「次は音楽か・・・歌はいいねえ～」

総一郎の声が後ろからする。

どこか付きまとわれている感じがしてならない

「ねえよ・・・」

小さく呟きつつ、彰は音楽室に入る。

(彰君、またオフになってる・・・)

心配しつつ、斗織も後に続く

「おい、夕月ちょっと」

総一郎に呼び止められて斗織は、音楽室の外に出る。

「何？」

「お前、石田とどういう関係だよ」

「幼馴染だよ……」

「それだけか？」

「それ以上に見える？」

「見えない」

即答されて斗織は落ち込む。

女学生の嫉妬の対象にもならない自分……

—あの子何？石田君といつも一緒じゃない？—

—ああ、幼馴染で、石田君のお父さんが、あの子の神社の神官してるんだって—

—ああ……父の上司の娘で、仕方なく一緒にいるのか～—

—まあ、あの子なら安心よ。間違いなんか起こらなさそうだし—

そう言われているのを知っている

「でも、前世では たいそう大事にされていたようじゃないか？」

斗織は一瞬身構えた

(この声……あの時の……)

「月の聖母(マリア)の転生か……」

総一郎の様子が豹変した。

(この声……あのときの男は保志君？)

がっ—

斗織は首元を捕まれた。

(こいつ……ただの高校生じゃない)

「保志慎一郎！席に着け」

異常を感じて彰が、教室から出てきた。

「今世でも……まんざらじゃないようだな」

笑いつつ彰の横を通り過ぎ、総一郎は教室に入る。

「斗織ちゃん大丈夫？」

彰のオフが解除された。

「あいつ……あの時の……彰君、保志君は……」

「斗織ちゃん」

気を失って倒れた斗織を彰は支えた。

「ここは・・・」

気がつけば保健室のベッドの上だった。

「保健室だよ。授業始まっちゃったね・・・」

椅子に腰掛けて微笑む彰が見えた。

「彰君が運んでくれたんだ・・・ごめん、授業、出ていいよ」

頭が混乱する。

「傍にいるよ」

自分が傍にいたのに、斗織と総一郎を接触させてしまった・・・彰は自分を責める。

「月の聖母(マリア) って・・・何・・・」

総一郎の言葉が気になる。

「それ、月子様の事だよね・・・」

うん・・・

彰は遠い目をする

「聖母マリアは処女懐胎したよね・・・実は、月子様も・・・」

え・・・

斗織は彰を見上げる。

花月から、月子様の子孫が夕月の一族と聞いてはいた。

それは、月子様が後に誰かに嫁いだのだとばかり思っていたのだが・・・

「独りで子供を生んだの・・・」

「一応、泰隆公の子と言われていた。皆そう思っていた。でも、泰隆公と月子様は何の接触も無かったんだ。最後に剣を月子様に渡す時、つながれた手以外は。」

想いさえ伝えることなく泰隆は逝った・・・彰は目を閉じて息をつく。

「精神力で身籠ったというの？」

「泰隆公への想いが強かったからだと思う。考えられるのは氷月の剣。

泰隆公の体内に在ったものだから、そこから泰隆公のDNAとか引き出して・・・」

斗織はシーツを被って号泣した。

残された者の孤独、悲しみが産み出した泰隆の形見・・・

「斗織ちゃん・・・」

シーツの上から、彰は斗織の頭を撫でる。

「僕は、だから総て終わるまでは、泰隆公の想いを忘れない。泰隆公が伝えられなかった想いを伝えるまでは、誰も愛さない」

(彰君 . . .)

彰の中にいる泰隆を、月子の元に返してやりたいと斗織は切に願っていた。

「師匠、実は保志総一郎のことなんですが、思い出したんです。裏の森で襲撃を受けた時の、あの黒尽くめの男・・・」

竹林に花月に呼ばれて来た斗織は、彼女の顔を見るなりそう言う。

「今頃気づくとは・・・お前は・・・」

接触しておきながら気づかない・・・致命的だった。

「いくら顔を隠しているとはいえ、月巫女が・・・」

情けない顔をされて何も言えない。

「こちらも調べはついた。というか・・・式を返された」

式返しができるのだから、そちらの者ということ・・・

「彰を狙っているということも、これで理解できるな」

「あの・・・月の聖母・・・と保志君がいったんですけど・・・」

「そんな事まで知っているとなると、ますます黒確実じゃな」

彰が保志総一郎を拒絶するのは、当然のことなのだ・・・

「月子様は本当に・・・その・・・一人で子供を・・・」

ああ・・・花月はため息をつく

「機会は与えたんだが・・・泰隆はくそ真面目な奴でな、あの時、自分が死ぬ事が判っていたから、手をださなかったんだろう・・・しかし、職務怠慢だ。

月巫女を次の世に送るためには、子孫が必要なのじゃ。他の誰でもない、泰隆と月子様の子孫が。あいつは判つとらんとう・・・」

口調とは逆に、花月の表情は辛そうだった。

「とにかく、修行しろ。お前の力は今は封印されているが、100%現れたらえらい事になるからな」

「どんな事になるんですか・・・」

「考えてみる、前世では二人だった月巫女が今世では一人。お前には月子様と泰隆二人分の力が現れるということだ。」

.....
斗織はまだよくわからない。

「判らんのか?!お前がその力に呑まれたら、氷月を継承する前にオシャカだぞ」

「え!」

「小さい器に水を沢山注げば溢れるだろう?受け止めきれない時は.....」

.....
真剣に月巫女を降りたくなる斗織・・・

(何も、好きで月巫女やってるわけじゃないんだから・・・)

半泣きだった。

「案ずるな。お前はそこそこの器を持って生まれた。が、念のためもう少し器を広げようというまでじゃ。18歳の誕生日はいつじゃ?」

「11月2日です」

「充分だから頑張れ」

はあ・・・・・・・・

「あの、何で、18歳なんですか？」

「術者として完成するのは大体18歳となっている」

何で・・・・・・・・

「生殖機能が完成してからが一人前とされているからのう。成長には個人差はあるが、18歳には、たいてい完成するだろう？」

ふうん・・・・・・・・

「彰の中の能力を100%引き出せるのも18歳以降、だからお前は彰の守り人として同じ日に生まれたのじゃ」

なるほど・・・・・・・・

「氷月の剣が彰の妖力を浄化するから、お前は氷月を継承しなければならない。

さらに狙っている奴がいるから、話はややこしいが、まあ、がんばれ」

そう・・・総ては彰のために、彰の解放のために修行してきた。それは変わらない。

泰隆から解放された彰が見たい。

だから、斗織は氷月の剣を継承してなお、勝たなければならない。

「判りました。頑張ります」

斗織の明るい笑顔に、花月は救われる

月子には無かったこの明るさは、周りを力づける。

花月は切に願うのだ。

闇夜を太陽のごとく照らす大きな満月が昇る事を・・・・・・・・

「・・・・・・という事だから、保志君には気をつけてね」

夕食の後、リビングでテレビを見つつ斗織は彰に、花月と交わした話の内容を告げた。

ここは人が多いけれど皆、斗織や彰とは生活を共にしないので寂しい。

家に独りの寂しさの何倍も寂しい・・・・・・斗織はここで独りでいたのだ・・・・

月子も日輪が来るまでは独り、御簾の影で一日中座っていた。

父帝と政の話しをし、星を見て、行く末を占い・・・・

友も無いままにすごし、やっと出会ったのが泰隆。

泰隆は桃や桜の枝を手折っては、月子に捧げた。時には猫をも・・・・

そのときの月子の笑顔は、悲しいほどに華やかだった。

斗織は常に明るい。

彰が寂しくないように、わざとおどけてみせる。

まるで、泰隆が月子を支えてきたように、彰を支えようとするかのようなようだった・・・・

「斗織ちゃんこそ、気をつけるんだよ。この前みたいに・・」

そうだ・・・・倒れて彰に心配をかけてしまった・・・・

「ごめん」

「僕こそ、守れなくてごめん」

守られるだけの弱い自分にうんざりした。

にゃあ～

突然、はっちーが斗織の膝に乗る。

「はっちーも訳ありだと思ってたけど、日巫女様の眷族だったとはね・・・・」

そう言って、斗織は猫を抱き上げる。その姿が月子と一瞬だぶって見えた。

「ね、このどこに氷月の剣がはいってるんだろうね・・・・」

そういつつ、はっちーの腹部をさする斗織を見て、彰は苦笑する。

父を亡くしてから、はっちーが斗織をずっと守ってきた。もう長い付き合いだ・・・・

「そういやあ、はっちーも年取らないね～」

(そりゃ・・猫じゃないし・・・・)

はっちーも苦笑する・・・・

「師匠とおんなじね」

しかし、10年も斗織の世話をするのは骨が折れる事だろう・・・・

「ね、もう一度、人に変身してみてよ～」

無理な頼みごとをしては、猫を困らせる斗織。

「ね、剣を身体に入れて痛くないのかな？」

花月のミンチ発言が頭から離れない。

「皆、そんなに苦痛があるようには見えなかったけど・・・怖い？」

そうねえ・・・斗織はため息をつく。

氷月を持つ資格が、果たして自分にあるのかどうか・・・自信は無い。

しかし・・・負けられないという事だけは事実だった。

放課後、担任の関に呼ばれて斗織は、職員室に向かった

(なんか・・・また怒られるのかなあ・・・)

こわごわ戸をあけると、国語教師の関俊彦は笑顔で迎えた。

「夕月～待ってたぞ」

(なに待ってんですか・・・)

隣には3-Dの担任、音楽教師の井上和彦がいた。

「井上先生、こいつが夕月斗織ですよ。夕月、井上先生がお前に会いたって」

何で？斗織りは身構える。

保志との事もあり、最近警戒心マックスである。

井上は見るからには、笑顔を浮かべた優しそうな教師ではあるが・・・

「先生の探している人がもしかして、お前の知り合いじゃないかって」

それ何?????

「音楽室で話さないか？」

「はい・・・」

促されて斗織は井上の後続く・・・

「夕月の家は神社なんだって？」

「はい」

「夕月も・・・巫女やってるのか？」

「ええ・・・まあ・・・」

廊下を歩きながら、ポツリポツリと答える。

音楽室に来ると井上は鍵を開けて戸を開けた。

「実は、巫女を探しているんだ・・・」

ピアノの椅子に斗織を腰掛けさせて、井上はそうやってきた。

え・・・

「想い人なんだけど・・・」

夕日が窓から差し込んで部屋を紅く照らした。

「夕月が警戒するのは無理も無い。お前は大きな使命を抱えていて、

石田と共に狙われる身。俺を敵じゃないかと思っても仕方ない」

(知っている・・・この人は・・・)

「俺の家は代々退魔師の家系だった。ある日、父は強い妖力を持つ妖怪を

退治しようとして敗北した。偶然通りかかったあの人が、妖怪を倒し父を家に

送り届けてくれた。命は取り留めたものの、父は足を痛め退魔師を引退したんだ。

そのとき俺は12歳だった。父の後を継ぐには、幼く、力も無かった」

だんだん暗闇が音楽室を侵食していく……

「あの人は俺を育てて、退魔師として訓練してくれた。そして俺が教師の資格を得て就職したとたんに、あの人は俺の前から去った……」

もしかして……もしかして……斗織は動悸を隠せない。

退魔師を訓練できて、妖怪退治ができて……斗織の知り合い……

”あの人”というのは……もしかして……

「もしかして……それは……」

「神城花月という女性なんだが……」

!!!!!!!!!!!!

やはり……

驚きのあまり斗織はフリーズしてしまった。

「私は会わんぞ」

帰って花月に井上の話をしたとたん、彼女はそう言った。

「なんだか判らないけど、師匠の事、探してるんですよ」

「考えてもみろ、私はあいつを12の時から10年間育てたんだぞ？お袋みたいな女を追いかけてどうする……」

ある意味、異常な事態に斗織は頭をかく。

「つまり……そのときから師匠は25歳のままで……井上先生は、今は師匠を追い越して28歳……」

「異常だろうか？」

ため息と共に斗織はリビングを出る。

「斗織ちゃん……」

廊下で彰に出くわした。

「一緒に宿題する？」

彰の精一杯の気遣いだった。

「ねえ……どうして師匠は会わないというの？」

彰の部屋で、数学の教科書を広げつつ斗織はつぶやく。

「相手は年をとっていくのに、自分は年取らないんだよ……一緒にいれないじゃない？

ましてや……結婚なんて無理だし」

愛するものと死に別れ、また出会い……その繰り返しに花月は疲れている。

「不憫だな……」

あ……彰は顔を上げる

「井上先生、退魔師だって言ったよね？」

「うん、裏の稼業は退魔師だって」

「巻き込みたくないのかも……」

そうか……

何も考えていない、思い付きだけで生きている人と思っていたが、実は情が深いのかも知れない。

「相手を思えば思うほど、軽はずみな行動は出来ないものだよ」

泰隆がそうであったように……

愛するもののために、自分の思いを閉じ込める事もある……そんな愛もある。

彰は夢を渡って、それらを見てきた。

「でも・・・会わせたいの。ダメかな？」

会えば辛いだろう・・・しかし、このままでは後悔するかも知れないお互いに・・・
そんな気がした。

「おい！弟子～～謀ったな！！！」

斗織に”お爺様がお呼びですよ”といわれ応接室に行ってみると、そこには和彦の姿があった。

「花月さん、お久しぶり」

昔の少年は、今は年上の男になって目の前にいる。自分は変わらない・・・

あの時のまま・・・

「和彦！何しにきた」

そっと目をそらせる。

「家庭訪問です」

優しく笑う和彦がそこにいる。

「たわけ！お前は弟子の担任ではなからうが！」

「探しましたよ、どうして私の元を去ったのですか？」

「お前が不憫で、一人前になるまで面倒見てやったまでの事。これ以上私に何をしろというのだ」

相変わらずの強気な口調も、和彦には愛しくてたまらない。

「本当に可愛い人ですね・・・」

「お前！仮にも育ての母兼、師匠に何てことを」

動揺している・・・明らかに自分は動揺している。何よりもその事に一番焦りを感じる。

「今は、貴女を支えてあげられます。そうしたくて、今まで頑張って修行してきたのですよ」
立ち上がると、和彦は花月に歩み寄る。

小さかった少年はもういない。自分より高い背、広い肩幅・・・

息子のように思っていた、それがあの日、男に見えた その衝撃は大きい。

もう誰も愛さないと決めていたのに。

愛するものと共に老いてゆくことは出来ない。

いつしか父娘のようになり・・・祖父と孫のようになる。

そして・・・相手は生を終える・・・

そんな辛い思いはもう出来ない。だから去るしかない。

「お前は何もわからない、判ってない。私を苦しめるな」

そう言って応接室を出てゆく花月とすれ違いに、お茶を持って彰が入ってくる。

「ふられたよ・・・」

笑いつつ和彦は再び腰掛ける。

「先生・・・日巫女様は、かなり先生の事を大事に思っておられるようですね」

それはわかっている。しかし・・・

「一人は寂しいじゃないか？俺は、あの人のお陰で寂しくなかった。だから今、あの人の傍にいてあげようと・・・それさえダメなのかな？」

彰は頷きつつ、和彦に茶を差し出す。

「大人の事は僕には、さっぱり・・・」

（斗織ちゃん怒られちゃうなあ・・・）

少し苦笑する。

「夕月に悪い事したな・・・あの人の性格からすると、八つ当たり間違い無しだ」

「でも、会えてよかったですか？」

彰の言葉に、和彦はうなづく。

「ああ、全然変わっていないあの人に会えてよかったよ」

「じゃあ、来てください。時々・・・」

すでに事態を予想して、どこかに隠れているだろう斗織を思いつつ彰は笑った。

「いい加減に帰らんか！日が暮れとろうが！」

「ぎゃああ〜〜〜」

竹林に潜んでいた斗織は、突然の後ろからの声に驚き、悲鳴を上げた。

「・・・あほか・・・お前・・・」

振り向いてもう一度、悲鳴を上げる。

「ぎゃああ〜〜」

ぼこっ 花月の拳骨が直撃した。

「うるさい、一々・・・」

頭に一撃されて半泣きな斗織。

「行くぞ」

とぼとぼと花月の後ろをついてゆく・・・

「あの・・・」

「和彦は帰った」

はい・・・

「愛するものに先立たれたら、辛いだろう？残りの時間もてあますだろう？」

月子の半生がそうだったように・・・花月の過去がそうだったように・・・

「私は和彦を悲しませたくない。忘れることを望んだのに、あいつは忘れてくれなかった。どうすればいいのだ？」

残されたものが辛い思いをすと言いつつ、井上先生が辛い思いをすとは。どういうことだろう・・・

斗織は首をかしげる。

「私は、碧凧に会えば消える身だ」

え・・・斗織の足は止まる。

「日の巫女は魂をつかさどり、月の巫女は肉身をつかさどる。私達は18歳になった時、それぞれの魂と肉身を失い、1つとなるはずだった。それが出来ないまま、私は器に

出会うべく生きながらえているのだ」

では・・・

斗織は顔を上げて花月を見る。

器に出会うと、花月は肉身をなくす・・・

「しかし・・・本当に器は存在するのかどうか・・・」

碧凧は存在する。しかし、どんな状態で存在するのか・・・

「それに、事を終えれば、私は用無しだ・・・」

「皆同じですよ・・・出会えば別れは来る・・・それでも井上先生は・・・」

はあ～～～

花月は星のまたたく空を仰ぐ。

「あいつは知っている多分。だから、私の最期を看取る気だ」

え・・・・・・・・眩暈がした。

そんな悲壮な覚悟を和彦がしているというのか・・・・・・・・

自分には出来るだろうか？ 彰の最期を看取るという事が。

涙が流れる あまりにも辛すぎた・・・・・・・・

「井上先生・・・・・・・・」

「私は月子様を見てきて、残されたものの辛さを知っている。実際、幾度と無く
経験もした。だから・・・・・・・・」

それでも・・・・・・・・それでも・・・・・・・・斗織涙を零し続ける。

独りで逝く事は辛いと・・・・・・・・・・

「師匠、質問です」

竹林のはずれで、ふと斗織は立ち止まる。

「どうして日巫女と月巫女と氷月の剣は、まとまって一人の人間として生まれてこなかったんですか？無駄が多すぎませんか？」

花月は斗織を振り返る。

「ふむ、いい質問じゃ。万が一、一人であった場合・・・そいつが襲われたら？死んだりしたら？」

「終わります」

「だろう？」

それぞれがスペアーを準備されていたという事か・・・

「18歳までは術者としては未熟だ、そんな状態で拉致されたら、なんにもなるまい」
事実、月巫女である碧凧はさらわれた・・・

「しかし、オリジナルほどの能力をスペアーは持たん。これが問題じゃ・・・」
すみません・・・

「とにかく、一人でもオリジナルが残っておれば勝算は無くはない」
その貴重なオリジナルが花月という事になる。

「特にお前は月子様と泰隆の血をひいたサラブレッドじゃから、能力は半端ないと期待しておるぞ」

再び二人は歩き出す・・・

竹林を抜けて神社の入り口までくると、向こうから彰と総一郎が歩いてくるのが見えた。

「あれ・・・保志くん・・・」

「アレが彰のストーカーか・・・」

思わず隠れてしまう斗織と花月・・・

「今日はありがとう。」

「じゃあ、保志慎一郎、気をつけて・・・」

「・・・石田、俺は総一郎だよ・・・」

そう言って総一郎は帰っていった。

「確かに・・・あいつは胡散臭いぞ～見かけは可愛いけどな・・・」

「可愛いですか？」

斗織には彰しか見えていないので、良くわからない

「男のクセに可愛いだろう？」

「彰君と、どっちが可愛いですか？」

何をはりあっているのだ・・・斗織・・・

「それは・・・好みの問題で・・・」

「斗織ちゃん・・・」

振り返ると彰がいた・・・

「何をこんなところで、こそこそしているんですか？」

バツが悪くて、斗織と花月は顔を見合わせる。

「ところで・・・保志君何しに来たの？」

「僕の忘れ物を届けに来てくれたんだ」

ふうん・・・

「それで、何で今日はありがとうなの？」

「神社内を見学させてくれって言ったから・・・」

それって・・・

斗織は花月を見る。

「もしかして・・・氷月のありかを探りに来たのか？」

「宮司様は結界が張ってあるから問題ないと仰ったから・・・」

ふうん・・・花月は腕組をする。

「つまり松栄は、敵をわざと内部に入れて、実力を見てみようとしたのか？」

「そういう事ですね・・・」

彰は苦笑する

しかし・・・

花月は顔をしかめる。

恐らく和彦の気を悟られた・・・

「あいつ、見かけは可愛いのに中身は黒いのう・・・」

(師匠・・・もしかして保志君がタイプなんですか・・・)

斗織は呆れて何も言えない。

「彰といい勝負じゃ・・・」

「日巫女様・・・僕のどこが黒いというんですか・・・」

さわやかな笑顔で彰は反論する。

「隠しても判る」

「師匠～彰君に、なんか恨みでもあるんですか？」

「本性は黒い。隠さずとも良い。可愛さといい、黒さといい、いい勝負じゃ」

はははは・・・彰は涼しげな声で笑う。

「それは褒め言葉として、とっておきます」

黒髪をさらりとかき上げて 彰は先に立って歩き出す。

「な？黒かろう？」

花月は斗織に目くばせをする。

しかし・・・斗織には、その黒ささえ魅力的である。

もう好き過ぎて、何でも良くなってしまっていたりする・・・

夕食後の団欒のひと時・・・

母、真季子の入れた紅茶を前に 花月、斗織、彰は並んでソファーに座る。

「師匠、保志君はボスキャラですかね」

テレビではバラエティー番組が流れ、にぎやかな笑い声がした。

「いや、黒幕は他におる。私と同じ、千年以上生きておる妖怪のような爺いがな・・・」
え・・・

斗織と彰は驚いて顔を見合わせる。

「異端の陰陽師、矢守の一族じゃ」

矢守・・・話には聞いていた。

朝廷から無実の罪で追われた陰陽師の一族。

話は当時の陰陽の頭、土御門高彬の最愛の従者、蘇芳を帝がよこせとやってきた事から始る。

高彬は蘇芳を手放そうとはせず、そんな彼を帝は謀反者として追う・・・

蘇芳は高彬を守るため自ら命を絶った。

しかし、高彬の復讐を恐れた帝は、彼を無実の罪で処刑した。

ただ独り残された高彬の息子、高平が、その血筋をひいて今に至る。

高平は生き延びて、民間に入り、弱き者の味方として、権力にたちむかった。

元は夜守から由来して、闇を統べるものとされている。

主に暗殺に手を貸す術者の一族である。

「さらに、”保志”というのは矢守の分家の姓なのじゃ」

「じゃあ・・・慎一郎は・・・矢守の・・・」

「彰くん、総一郎だってば・・・」

しつこく間違える彰が謎である。

「一族の中では、救世主と呼ばれている。高彬公の生まれ変わりとな・・・」

「えっと・・・時代的には、どうなるんですか？月子様の時と？」

「高平が父の無念を晴らすために、能力を最大限に高めて不死を手に入れた。

そのときには100歳の爺さんになっとなったがな。もちろん帝も代替わりしている。

時の帝は月子様の父上であった。このときは以前のような権力にまかせた横暴は

一切なかったが、それでも、奴の権力に対する憎しみは消える事がなかった。

都総てを破壊するつもりで奴は、左大臣に取り入り、参謀という形で宮仕えした」

彰は顔を上げる。

思い当たる。夢でいつも黒い影を背負った老人を見ていた……

「皆は奴を闇老子と呼んでいた」

7歳のとき、父に襲い掛かった敵……氷月の剣を奪おうとしたもの。

「と、まあ、保志については、そこまで調べた」

はっ……斗織は花月を見る。

「それ、井上先生から聞き出したんでしょ？」

和彦なら学校の名簿で調べられる。

「ばれたか～」

ははははは……

ごまかし笑いの花月に、斗織は呆れる。

拒んでいたのに、何を手伝わせているんだ？

「とにかく、そういうことだから～」

……どういふことなんだ……

週末の午後、斗織は潮音宅に招かれて、お茶を飲んでいた。

「やっと仕事が一段落してね・・・斗織に会いたくなかったの」

部屋着もタイトでスマートな、洗練されたスタイルの潮音に、斗織はいつも感動するそれに引きかえ自分は・・・綿シャツとジーンズだったりする。

「新しい”月子”が出たから、斗織にも渡そうと思って・・・あ、これは彰君の分ね」

「彰君に・・・ですか？」

西洋人形を作っている潮音が、和風の黒髪の人形を作り始めた。

オリエンタルビューティと人気の高い、その人形は”TUKIKO”と名づけられて

人気であるが、これは潮音が花月から聞いた月子の面立ちを再現したものであった。

花月に言わせると瓜二つらしい・・・

「最近判ったんだけど、彰君、ウチのお得意様だったのよ」

え・・・何の事が判らず、斗織は首をかしげる。

「月子の初販の頃からオーダーしてたの。新シリーズのお知らせするために顧客リストを見て、見つけて・・・それから色々漁ったら・・・」

「同姓同名の別人じゃないんですか？ほら・・・有名なほうの人かも？」

「住所が同じでね、最近、住所変更届けが出てて、そこが夕月神社の住所なの」

・・・・・・・・・・・・・・・・

彰にそんな趣味があったのか・・・

まあ・・・彰の中の泰隆が月子を求めても不思議は無いが・・・

「月子の出る前も、時々オーダー受けてたけどね」

そうなんですか・・・

「今回は特別、十二単衣の月子なの。」

とケースを開けて見せる潮音の手元を見て、斗織はめまいを起こす

「やはり・・・くるかしら？」

「はい・・・これ・・・販売されているんですか？」

「一般用は、振袖仕様なの。斗織と彰君には特別仕様」

ぽろぽろ・・・我知らず斗織の瞳から涙がこぼれる

自分の中の月子が反応していた・・・

「でね、斗織、保志という姓を知っているかしら？保つに志すと書いて保志
なんだけど・・・」

「保志・・・総一郎が何か？」

潮音はうなづく

「やはり知っているのね・・・保志総一郎を。月子のお得意様なの」

がくっ・・・斗織は力が抜けた・・・

(人形オタクか！！！！保志総一郎～！！！)

「保志は矢守の分家よね・・・」

その事は潮音のほうが詳しい

潮音の家の本家筋にあたる檜山家は、代々土御門家に仕えていた。その土御門家の宿敵が矢守一族なのだ。

「何か・・・因縁めいているというか・・・企みを感じるというか。変な偶然よね」

はははは・・・

不安を払いのけるかのように斗織は笑う。

「ただの人形オタクですよ～きっと・・・」

しかし・・・不安は隠せない。何か重要な事を忘れていた気がしてならない。

彰といい総一郎といい、月子にこだわり続けているのも気になる。

(彰は仕方ないかもしれないが・・・)

「でも、幼馴染なのに、知らなかったのね。彰君がお人形集めてる事？」

斗織は頷く。

彰の部屋には、人形ののにの字もなかったのだ。

「隠してたのかな・・・」

「まあ・・・恥ずかしかったのかもね、男の子がお人形が好きなんて、誤解されそうじゃない？」

「いえ・・・隠し持っているほうが何倍もアヤシイですが・・・」

自分に隠し事・・・斗織は少しショックだった・・・

「彰君、これお姉様から・・・」

帰るなり、斗織は彰の部屋に行き、人形を渡す。

「え、僕に？」

「新しく販売になるTUKIKOよ」

ぎくっ～

一瞬、彰の顔がこわばった

「まだ・・・オーダー開始していないよね・・・」

やけに詳しいじゃないか・・・斗織は呆れる。

「もうバテてるよ～お得意様なんだって？」

はははははは・・・笑うしかない、追い詰められた彰。

「しかし、人形作家のニアさんが斗織ちゃんのお姉様だったとはね・・・」

斗織は彰の部屋を見回す。

「どこに、隠しているの？」

「え」

「お人形」

「隠してるなんて人聞きの悪い・・・」

と本棚の一番上のスペースにかけられた覆いをめくる。

「直射日光を避けてるんだよ」

ガラスケースに並べられた人形が現れる。

割と潮音の初期の作品も見られるが、やはり、TUKIKOのシリーズが多かった。

「買ったの？わざわざ？結構高いでしょう？私に言ってくれば、お姉様からもらってあげたのに・・・」

「斗織ちゃんも持ってるの？」

「うん、お誕生日とかにプレゼントしてくださるの」

「それにしても、お部屋に置いてないよね？」

「私のは特別仕様で、販売されていないタイプなの。だから、コレクターとかに見つかるとうるさいから隠してるんだ」

特別仕様・・・彰の表情が変わる。

コレクターとしては興味津々である。

「ほら！なんか物欲しそうな顔する！だからコレクターはもう・・・」

「見せて」

有無を言わさぬ彰の気迫に、二人は斗織の部屋に向かう。

「わあ～これすごいね・・・これ、セント・ローザンの制服着てるよ」

斗織の部屋で潮音の人形を眺めつつ、彰がため息をつく。

「薔薇様のイメージで作ったんだって。ほら、来栖ミサ様よ」

「これ・・・スカーレット・オハラ衣装着てる・・・」

「私のリクエストなの・・・」

「すごいレアだね・・・」

目の色が完全に変わってしまっている彰に驚きつつ、斗織は苦笑する。

「そんなに好きなの？」

「うん」

少し寂しい気がした。

「そっか・・・彰君も美人が好きなんだ。お人形みたいな可愛いものが好きなんだね」

「何？妬いてるの？」

つか・・・もう・・・

「お人形は所詮お人形だよ。いくら美しくても、人の肌の感触や体温までは望めないだろう？人が求めるものは人なんだよ」

そう言って自分の頬に触れてくる彰の指先に、斗織は凍りつく。

そして思わず後ずさりする

「彰君・・・なんか変だよ・・・」

くすっ・・・彰は笑う

「斗織ちゃんは、だからカレシできないんだよ。」

へ・・・

「上手くかわせないとね～こういうものは」

はあ？

（もしかして・・・遊ばれた？）

「でも、僕は普通に男だから。妖精とか中性とか、性別石田とか色々言われてるけど、お人形好きでも、男だから」

皆から変に王子様の綺麗なイメージを持たれて、男っぽい部分が見えると拒絶される・・・彰はうんざりしていた。

なまじ見かけが可愛いだけに苦労はあるらしい。

が・・・

おちょくられて息絶え絶えな斗織は半分死んでいた。

「おい、彰。あんまり弟子をおちよくるなよ」

夕食の後、自室に帰ろうとする彰を花月は呼び止めて、縁側に誘う。

「斗織ちゃんがなにか・・・」

「言うわけけなからう！言ったら私にまでおちよくられるからのう」

・・・・・・・・ナンなんですか・・・

彰は、花月が人の心が読めると言う事を思い出した。

「お前はそれほどでもないかもしれんが、弟子は誠心誠意、お前にイカれておるからのう。そんな女心を弄ぶのは最高に悪いぞ」

(誠心誠意イカれてる・・・どういう言い方ですか)

「お前に”死ね”と言われたらマジで死ぬような奴だ、軽々しい冗談は控えろ」

「すみません、軽率でした」

「思春期だからお前も色々あるだろうが・・・」

はあ・・・

「問題は起こすなよ」

日巫女様・・・・・・・・彰は絶句する。

「弟子を守れ。保志が、お前と弟子の間に割り込んでくるのは、お前達の均整を崩すためじゃ。弟子のお前への想いは、充分に利用価値がある。そこさえ崩せば月巫女は闘う事すら出来なくなる」

月子と泰隆の間にも妨害者がいた・・・

みなもとのやひこ

源弥彦・・・当時頭の中將だった彼は月子の親衛隊で、常時警護に当たっていた。

そして、偶然に垣間見た月子に片思いしていた。

弥彦と泰隆は親友であったが、月子への想いから弥彦は、徐々に泰隆に嫉妬の思いを抱くようになる。

一宮様は俺を愛しているー

そう泰隆に思わせる企みを、何度も仕掛けて、泰隆を惑わした・・・

弥彦と総一郎の手口が似ているのだ・・・

「痴情のもつれは避けるよ。力が分散する」

「気をつけます」

ああ～ああ～

花月は星空を仰ぐ

「で、実際、ぶっちゃけた話、どう思ってるんだ？弟子の事？」

彰は言葉に困る。自分でも、斗織が自分にとって、どんな存在なのかわからない。
考えた事もない。

いつも、当たり前のように傍にいた。いて当たり前だった・・・・・・・・

「ま・・色気は無いから、女には見えないだろうけど・・」

(日巫女様・・酷いなあ・・)

「たとえば、斗織ちゃんに彼氏が出来たら、僕なんか忘れられるんだと思うと
心が重くなって・・逆に、僕が他の子と付き合い始めたら、もう斗織ちゃんと
一緒にいられないんだと思うと、告白されても付き合う気なんか全然起きなくて・・」
花月は、彰の後ろに泰隆の影を見る。

月子の転生を見守ろうとしている彼の気配を感じる。

「まあ・・弟子の事、粗末にするなよ。あれでも月子様の転生だからな」
と花月は立ち上がる。

日巫女様・・・・・・・・

彰は、その後ろ姿に日輪を見た。

いつも泰隆と月子を見守ってきた日輪・・・・・・・・

月子に対する愛情は、転生である斗織に対しても、変わりなく注がれている。
(言う事と、やる事はメチャメチャなんだけど・・・・・・・・)

彰も立ち上がり部屋に向かう。

「弥彦」

出仕してきた弥彦に、泰隆は声を掛ける。

「泰隆、今から宮様のところに行くのか？」

「ああ。お前も来るんだろう？」

ああ、弥彦はうなづく。

「後から行く」

と、弥彦は泰隆の手元を見た。

桜の枝・・・・

「最初に咲いた桜の一枝を、差し上げるお約束をしたんだ」

そうか・・・・笑いがかすかに軋んだ。

「ではお先に」

と、去っていく若き陰陽頭は、弥彦から見ても凛々しく美しい。

自らも左大臣家の一人息子でエリートなのに、なぜか彼には、勝てない何かを感じる。

こんな黒い感情は、泰隆と月子が御簾越しに笑いあいながら、話していた光景に出くわしてからだった。

それまでは自分が、月子に一番近い存在だと思っていた。

歳も近い、親衛隊と言う立場上近くにいる自分が、誰よりも月子をよく知っているはずだった。

なのに・・・・泰隆が陰陽頭に就任した。

弥彦が唯一認める、最高の男が・・・・

術者としても、人としても申し分ない親友。

家柄では勝っているとはいえ、いつも泰隆は弥彦を不安にさせた。

そして・・・・予感的中・・・・

弥彦は四六時中 月子の傍におり、泰隆は3日に一度伺う程度なのに・・・・

時間など飛び越えて、二人は急接近している。

その焦りが彼の心を満たした頃、左大臣家に客人が来た。

ひどく年老いた老人で、目は異常に鋭い。

父、左大臣は彼を参謀にして屋敷に住まわせていた。

老人の存在は弥彦を不安にさせた。

見抜かれている・・・・自らの黒い感情を・・・・そう感じた

「頭殿、桜はお好きですか？」

「はい、宮様のお好きなものは何でも好きです」

ふふふふふ・・・・

鈴を転がすような声が響く。

「ご冗談もお上手……」

「本当ですよ」

月子の屋敷に着くなり、こんな場面に出くわした。

(なにじゃれてるんだ……)

イライラする自分が抑えきれない。

「頭中将殿……お越しでしたか」

後ろから来た日輪を振り返り、弥彦は仮面を被る。

「少し、遅れましたか……」

「いいえ。」

そういつて去る日輪は、左大臣家の客人に似ている。

彼女も、また自分の黒い感情を見抜いているのだ……

(何故、左大臣家の嫡子が陰陽師などに嫉妬しなければならない……)

自尊心は激しく傷つく……

しかし湧き上がる感情は抑えられない……

ばきっー

鈍い音とともに、手にしていた扇がへし折れた。

弥彦の力にあがらえず、力任せに折られた扇は無残な姿で今、弥彦の手に残る。

そして……

これが 破壊への第一章の幕開けとなった……

朝、教室に入って席に着くと総一郎は、ため息をついた。

昨夜の夢見がよくなかった。

時々、平安時代の夢を見る。

恐らくそれが自分の前世・・・・・・・・

源弥彦・・・・・・・・

一族は皆、彼を土御門高彬の生まれ変わりと言っているが、間違いだ。

自分は崇り神などではない。

ただの嫉妬に狂った報われない、浅ましい男・・・・・・・・

それを利用しているのは、昔も今も変わらない閻老子と言う事になる。

ふと、窓際に目を向けると、席に着いた斗織が、前の席の彰と笑いながら話している。

夢の中の月子と泰明のように・・・・・・・・

(転生してもなお、月子様は泰隆を・・・・・・・・)

そっと唇を噛む。

何とか彰を斗織から遠ざけようとしてきたが、相手にもされず。

肝心の斗織は、彰しか見えない彰バカになってしまっていた・・・・・・・・

「なんで、俺じゃダメなんだろうか・・」

彰に、斗織に妹以上の感情は無いらしいと見込んだ総一郎は、彰に近づいた。

が、彰は平常心を崩さない訓練のため、揺るがない。

男の自分が、彰に言い寄るという異常な事態も、腐女子な斗織には、すんなり受け入れられてしまった。

今では総一郎は腐男子扱いされている。

「調子が狂う・・・・・・・・」

直接、斗織を崩すべきだったのか・・・・・・・・

明らかにモテない組の斗織なら、告れば舞い上がって総一郎のものにならないとも限らない・・・・・・・・

いや・・・・・・・・それともやはり、高嶺の花の彰しか見えないのだろうか・・・・・・・・

(一体、あいつら、どういう関係なんだ・・・・・・・・)

斗織に接近したら、彰はどうするだろうか。彰の気持ちがさっぱりつかめないでいた。

しかし、一番不可解なのは自分……

二人の間に割り込み乱す事が自らの使命だが、総一郎は何故か斗織が気になる。

何のとりえも無い、10人並の容姿の斗織を自分のものにしたかった。

それは彰への対抗意識なのか……

それとも前世の名残なのか……

とにかく、彰に向けられている、あの笑顔がほしかった。

おかしい感情に邪魔されて、彼はあまりダイレクトに斗織に接触する事を避けていた。

(何を恐れているのだろう……)

斗織に見つめられる事が怖かった。自分の本心を悟られるのが怖かった……

(月子様……)

そう心でつぶやき、彼はため息をついた。

「夕月・・・」

靴箱の前で総一郎に呼び止められた。

「頼みがあるんだけど・・・」

なに・・・？身構える斗織に、総一郎は笑いかける。それが不自然で警戒してしまう。

（なんで、今日はやけに馴れ馴れしいんだろうか・・・）

「"あぶさん"貸してくれる？」

はあ????

固まる斗織に、総一郎はうつむいて話し出す。

「こういうこと、誰にも話せなくてさ、夕月なら持ってるだろうから・・・」

「なんで・・・今 "あぶさん"なわけ？」

その唐突さが判らない。

「昔、チョコチョコ立ち読みしてたんだけどさ、夕べ見たアニメで主人公が床屋で
'あぶさん'読んでてさ・・・なんか・・・思い出しちゃって・・・」

どんなきっかけだ・・・斗織は呆れる。

「いいけど・・・1巻から？」

「うん」

「5巻ずつでいい？貸し出し・・・」

「うん、ありがとう、助かるよ～」

と手を握られ、斗織は飛びのく。

（私には愛想の悪かった保志君が、いきなりなんなの・・・）

去ってゆく総一郎を見つめつつ斗織は理解に苦しむ・・・

「斗織ちゃん・・・」

彰の声がして振り返る。

「何話してたの？慎一郎と？」

「総一郎だよ・・・」

彰はまだ しつこく間違っている。

「ちょっと・・・あ・・・先生が保志君の事、探してたから教えてあげたの」

ヤバイ・・・嘘をついてから斗織はびくびくする。

「そう・・・なんか、慎一郎いつもと違ってたから・・・なんか仲よさそうだったね」

ぎくうう~~~~~

「や・・・妬いてるの？彰君てば～～」

しどろもどろにごまかしてみる

「あ・・・そうなのかな・・・なんか・・・気分がよくないなあ・・・」

え・・・・・・・・

「にしても、あいつは要注意人物だから気をつけて」

先に立って歩き出す彰を見つめつつ、斗織は複雑になる。

バレバレの嘘をついた自分・・・・・・・・

彰に今まで嘘などつかなかった・・・・・・・・

隠し事はあったけれども・・・・・・・・

”ドカベン”を全巻集めてたとか、”あぶさん”読んでることなどは、別に報告する事ではなかったから言わなかった。

なんとなく、女の子の嗜好でないので言えなかったのだ・・・・・・・・

なのに、この場で”あぶさん”を出してくるわけにはいかなかった。

(にしても・・・・・・・・保志君なんで知ってるんだ・・・・・・・・私が”あぶさん”持ってるって・・)

「斗織ちゃん・・・・・・・・帰るよ」

立ち止まる斗織に彰は振り返る。

「うん」

「それで、彰と気まずいと言うのか？あほか？」

夜、花月の部屋で斗織は今日の相談を持ちかけた。

「どうでもいいことで悩みよって・・・・・・・・」

花月は呆れる。

「”あぶさん”読んで何が悪い！隠す事か！」

「じゃあ・・・・・・・・師匠・・・・・・・・井上先生に真ん中に腐がつく人だって告白してありますか？」

「それだけは口が裂けても言うな！」

自分もそうじゃん・・・・・・・・斗織は拗ねる

「わかったわかった～オトメ心の微妙なところは理解しよう。しかし・・・・・・・・保志が弟子に接近してきたとは・・・・・・・・」

嫌な予感がする・・・・・・・・

「別に～保志君、私のことなんて、へとも思ってないですよ～」

しかし・・・・・・・・

総一郎が斗織に接近して、彰が微妙になっているとしたら・・・・・・・・

それが彼の作戦ではなかろうか・・・・・・・・

花月は頭を抱える。

「しかし・・・・・・・・弟子も、”あぶさん”とは渋い趣味じゃのう・・・・・・・・」

「師匠！！」

彰に知られたくない気持ちも判らないではなかった・・・・・・・・

最近、斗織と総一郎が自分の知らないところで、何かこそこそ話しているのが
彰は気に入らない。

今まで、斗織は自分にべったりだった。

それが当たり前と、傲慢になっていた事に気づく……

「彰、大丈夫か？」

いち早く危機を察した花月が、例の竹林に彰を呼び出した。

「何でもありません……」

強がりですべて笑ってみせる。

「保志総一郎は、源弥彦の転生だ。と言え、お前には見当がつくはずだ」

ああ……そうか……思い当たる事がある……

今の自分は、泰隆とシンクロしている。

「泰隆も平常心を乱された。あのクールな男がだ。恋情とはくせものだな」

空を仰いでいた花月が、不意に振り返る。

「これは弟子には内緒だが……」

と彰の耳元に顔を近づける。

「弟子は総一郎に “あぶさん”を貸しているだけだから……」

へ？

話が見えない彰はフリーズする。

「やはり……お前は”あぶさん”知らんのか……漫画じゃ。野球漫画」

「どうして、慎一郎がそんなものを斗織ちゃんから借りるんですか？それに、何故
僕に隠れて……」

はあ~~~~

花月はため息をつく。

「オトメ心というものじゃ……理解しろ。少女マンガならともかく、野球漫画は
渋かろう？一応、あれでも、気をつこうておるのじゃ……弟子も。」

「慎一郎は……僕を不安にするためにわざと……と言うことですか……」

「だろうな……さらに気をつけろ。あやつは恐らく弟子に気がある。月子様を弟子の中に見て
おる」

そんな……

彰は解せない

「今までスルーしていた事か？多分惚れた弱みで、あやつは弟子を恐れている。
だから避けておったのじゃ。しかし……だんだん弥彦の性質が現れてきたようじゃ。」

まあ、そう言うことだから、気にするな。可愛いじゃないか～惚れた男に少しでもいい印象を与えたいと、頑張ってるんだから・・・」

「そういうの嫌です。もし恋愛関係となるなら、駆け引き無しの、そのままを愛したいし、愛されたいんです」

彰は変わってきた・・・そう花月は感じた。

斗織に関してあいまいだった彼は、斗織が遠くなるのを感じると、とたんに独占欲を顕わにした・・・

「お前も、お人形・・・隠してたんじゃないのか？」

「アレは・・・」

言葉に詰まる。

「心を乱すな。それに・・・”あぶさん”のことは弟子には内緒だぞ？」

そう言って花月は背を向けて去ってゆく。

しかし、このどうしようも無い心のざわめきは抑えようがなかった。

夕刻、月子のところに来た泰隆は、任務を終えて帰る弥彦と鉢合わせた。

「今帰りか・・・」

「ああ、今日は代わりのものを待機させたからな」

と、手にもった桐の箱を差し出す。仄かに香が香る。

「宮様が調合された香だ、特別に頂いたんだ」

そう言いつつ、泰隆の様子を伺う弥彦・・・

「そうか・・・」

「陰陽師は香など焚かぬだろう？」

「いや、施術の時には焚くが、その香は、お前達貴族が楽しむ香とは少し違うな」

「あの、葉くさいやつか・・・興奮めだ」

そう言って笑いながら去ってゆく弥彦を、泰隆は見送る。

(月子様が弥彦のために香をあわせられた・・・)

心中はなぜか穏やかではない。

「泰隆・・・参ったか」

振り返ると日輪がいた、

「気にするな。あの香は弥彦宛ではない。弥彦の姉の嫁ぎ先が、右大臣家で月子様のお母様のご実家と同じゆえ、このたびのお祖母様の誕生祝いを弥彦に託されただけ事・・・なまじ宮様だけに、直接送ると余計な詮索をされるからのう・・・」
では何故、弥彦は自分が頂いたような事をいうのか・・・

泰隆にはわからない

「泰隆・・・惑わされるな・・・お前らしくないぞ」

そう・・・自覚はある。

最近、なぜか心がうつろだ。些細な事で揺れ動く。

特に、月子に関しては・・・

「中将殿には困ったものだ・・・わざわざ泰隆をかき回しなさる・・・」

そう言いつつ日輪は、月子の部屋に向かって歩き出し、泰隆もそれに続く・・・

「日輪さま・・・私は最近変なのです。平常心を保てません・・・」

陰陽師の中でも特に冷静で私情を一切挟まず、術に関しては極悪非道なまでに容赦ない泰隆が、近頃人間臭くなってきている事に日輪は複雑な思いを抱く・・・

彼にとって、それはいいことなのか・・・

「私は・・・壊れてしまった・・・」

ふっー

ーもしかして血が通っていないのではないか・・・ー

ー頭殿は木の股から生まれたんだ・・・ー

陰陽寮では、そんなささやきに満ちていた。

そんな泰隆が・・・

「壊れたんじゃないくて、成長したんだらう？」

この歳若い従弟は”男”になろうとしている・・・

「お前も男になるんだな・・・」

「日輪様！」

めったに見れない、困惑した泰隆に、日輪は笑いかける。

時は確実に進んでいる。

これは仕組まれた恋慕・・・

「安心しろ。月子様は弥彦などに、お心に入れてはおられん」

出会った瞬間から、月子には泰隆しかいない・・・

「しかし、弥彦は邪魔してくるから、気をつけろ」

そう言って立ち止まった日輪は、もう一度泰隆を振り返った。

月子の部屋の前で・・・

体育の時間に使ったサッカーボールを、倉庫に運ぶ途中の彰に、総一郎は駆け寄る

「手伝うよ」

彰は表情を変えず、何も言わない。

「なあ、夕月って結構面白い奴だな。地味でうっとおしい奴だと思ってたけど

俺と趣味が合うし・・・」

ボールの収納ケースを押しつつ、総一郎は彰を観察する。

「なあ、石田？3人で今度、映画でも見に行かないか？」

彰は依然として拒絶モードである。

「お前ら、タダの幼馴染なんだろ？」

答える気のない彰は、黙って体育倉庫の戸を開けて入る。

薄暗い倉庫で、ふいに総一郎は彰に詰め寄る。

「石田、俺と夕月の仲、取り持ってくれないかな？」

「ナンだよ、それ・・・」

耐えかねて口を開いてしまう彰・・・

「だから～3人で映画観に行って、石田は途中で用事を思い出して帰るんだ・・・」

後は、俺と夕月の二人でデート・・・」

「慎一郎！！！」

いきなり鋭い声で呼ばれた総一郎は緊張した。

「先に行く・・・」

去ってゆく彰を見つめつつ、総一郎は顔をしかめた。

「石田・・・俺は・・・総一郎だってば・・・」

「斗織ちゃん・・・あんまり慎一郎とかかわらないほうがいいよ」

学校の帰り道で、彰は不意にそう言った。

「別に・・・かかわってないよ」

「あいつは、源弥彦の転生なんだ。源弥彦が誰か、判るよね？」

斗織はうなづく。

「最後に、泰隆を裏切った頭の中將・・・」

嫉妬に狂い、親友を裏切った。

「何かたくらんでいる。あいつは・・・まだ月子様のことを・・・」

はははは・・・斗織は笑う。

「大丈夫だよ～ 保志君は、私なんか、なんとも思ってないよ～それより、彰君こそ
気をつけてね。あいつ絶対彰君の事、狙ってるんだから～」

この鈍さが救いなのか・・・彰はため息をつく。

「あいつ、斗織ちゃんに付き合ってくれとか言って来たりする？」

「するわけ無いじゃん～～もう～～」

大笑いで彰の背中をたたく斗織・・・・・・・・

「もし・・・告白されたら・・・どうする？」

え・・・・・・・・

斗織は思いっきり渋い顔を見せた。

「きもいよ・・・・・・・・」

「そうかな・・・・・・・・あいつ、なかなか人気あるよ。可愛いし好感度NO1で・・・・・・・・」

「無いよ。私・・・・・・・・あいつに襲撃されてるんだよ？」

竹林に入ったところで、強い風が吹きすさんだ。

さら・・・・・・・・さら・・・・・・・・さら・・・・・・・・彰の黒髪が風に揺れる。

「あいつの目的は、氷月の剣でも、泰隆の妖力でもないよ・・・・・・・・月の巫女を僕から奪う事だ・・・・・・・・」

そう・・・・・・・・これはあの時の雪辱戦・・・・・・・・

「彰君・・・・・・・・」

いつもと違う彰の気配に斗織はただ、立ちすくむだけだった。

「どこにも行かないよ。私はずっと彰君の傍にいるから・・・」

斗織は彰の腕をとる。

「でも、いつかは・・・離れ離れになる・・・」

ずっと一緒にいられるわけなど無い。斗織が月の巫女としての役目を終えれば自分と行動を共にする理由もなくなり、大学生になり・・・社会人になればそれぞれ人生の伴侶を見つけ、結婚するのだ・・・

ははは・・・

斗織は、それを笑い飛ばした。

「それが嫌なら、私を嫁に貰うんだね～～」

「いいの？それで・・・」

今、ここで人生の伴侶を決めてしまえるのか・・・

「私は構わないけど、彰君はどうか～私なんかより、もっといい人を見つけるんじゃない？」

そう言って斗織は彰の手を引いて歩き出す。

そんなところが、姉のようでもあり、母親のようでもあった。

深刻な悩みさえ、笑い飛ばしてしまう斗織・・・

「それって・・・笑える事？」

「なにが？」

「将来僕が、他の人と結婚して、遠くに行くこと・・・」

ふうん・・・

先に歩きつつ、斗織は考える。

「彰君が幸せになるんなら、それでいいよ。メチャメチャ辛いけどね～」

どうしていつも斗織は自分を殺せるのか・・・

彰にはわからない。

「でも、私のこと離したくないって、思っていてくれるんだ～幸せだな」

そんな斗織の背中を見ていると、彰は涙が溢れてくる。

自分はなんて小さいのか・・・

風景がかすむ中で、ただ、斗織に手を引かれて歩いている・・・

斗織は闇夜を照らす月なのだ・・・迷うたびに、道を示す月。

だから、自分には彼女が必要なのだ・・・

「保志君が、何か言ったのかもしれないけど、そんなの気にする事無いよ」

何故、今まで気づかなかったのか。自分の中の斗織の存在の大きさに・・・

しかし、それに気づいてしまったと言う事は、弱点を見つけたも同然だった。

「僕は、だんだん弱くなる」

そう言って俯く彰を、振り返ることなく斗織は前に進む。

「強くなくていいよ～私が守るから」

月の光に包まれているような、柔らかな温かい感覚が彰を包む。

それは、昔 泰隆が月子に感じた安らぎと同じものだった。

下校の途中で、和彦と出くわした彰と斗織は、誘われるままに近くのカフェに入った。

「ケーキ食うか？奢るぞ」

席につくと和彦はそう言った。

「じゃあ・・・イチゴパフェを・・・」

和彦にすっかりなついている斗織は遠慮しない。

「石田は？」

「ミルクティーを・・・」

ははは・・・和彦は笑う。

「お前ら、面白いなあ・・・」

斗織が面白いのはもともとだが、自分までも面白いと言われて彰は苦笑する。

オーダーを済ませると、和彦は真面目な顔をした。

「どうだ？最近は」

「変わらないですよ～相変わらずマイペースで・・・」

「いや、花月さんの事じゃなくて、お前達のこと。」

え・・・・・・・・

二人は顔を見合わせる。

「師匠が何か言いましたか？」

「見れば判るさ・・・保志との三角関係。面白いな～」

先生・・・・・・・・斗織は呆れる。

「つか、気にするな。」

「その事で、僕達をここに？」

「気になってな・・・」

そこにオーダーがきた。

そんな細やかな心使いが、斗織にはありがたい。

「花月さんも、相変わらずか・・・」

コーヒーを飲みつつ和彦はつぶやく。

「あの人は強がってるけど寂しがりやだから、相手になってやってくれよ」

「また、来てください」

斗織の言葉にうなづきつつ、和彦は思い出し笑いをする。

「夕月・・・気をつけろよ～あの人はお茶目だから・・・・・・・・」

少し沈黙が流れる。

「修行だとか言って、カメハメ波とかやらされるぞ・・・」

げえっ・・・・・・・・

固まる斗織。彰は苦笑しながら和彦を見つめる

「先生も、させられたんですか・・・」

「ということは・・・」

「斗織ちゃん、すでに犠牲者ですけど・・・」

そうか・・・・・・・・

3人は深い沈黙に陥った。

「あれは・・・子供心にイタかったなあ・・・」

それでも花月が好きという和彦が、理解不可能だった。

「皆にやってるんですね・・・師匠恐るべし・・・」

そして、思い出したように彰を見る。

「ねえ、もしかして・・・月子様にもさせてたんじゃあ・・・」

「まさか・・・」

そのような場面は夢に見たことは無い・・・

「夕月・・・平安時代にカメハメ波はないぞ・・・」

「というか、いくら日巫女様でも宮様には・・・」

「そうだね・・・」

斗織と和彦は顔を見合わせる・・・

「私達は一般市民・・・日巫女様のおもちゃ・・・・・・・・」

しかし、3人は知っていた。それが花月の最大の愛情表現であることを・・・

はくしょん一

潮音の家で、夢幻齋と話していた花月はくしゃみをした。

「お風邪ですか・・・」

紅茶をh運んできた潮音が微笑む。

「いや、バカ弟子が噂しているんだろう・・・」

「お弟子さん？恋人ではなくて・・・ですか？」

女のように儚げで美しい笑みを浮かべて、夢幻齋は訊く。

「夢幻齋、私をおちよくと怖いぞ」

挑戦的な花月の視線に、一步も引くことなく夢幻齋は笑う。

「怖いですねえ・・・」

つかみどころの無いこの優男が、花月は苦手だった。

夢幻齋、潮音、花月・・・・・・・・

穏やかな表情の裏は狐と狸の化かしあい・・・

魑魅魍魎のブラックホールだった・・・・・・・・

「潮音さんの運命の巫女にもお会いしたいですね・・・」

念願の日巫女との邂逅を果たして夢幻齋はご機嫌だった。

「バカ弟子か・・・なかなか面白い生き物だから、是非会うがいい」

あまりな言い方に潮音は苦笑する。

「日巫女様・・・これでも私のプチ・スールなんですよ・・・そんな言い方は・・・」

「すまんすまん・・・」

ふうん・・・・・・夢幻齋は頷く。

「月の巫女で、月子様の転生。花月さんのバカ弟子であり、潮音さんのプチ・スールでもあり、過去にロサ・キネンシス勤め上げた高校生・・・興味ありますねえ」

イメージがバラバラすぎて、あまりに散漫な斗織像である。

「泰隆の転生にも会え。なかなか可愛いぞ～ 黒いがな・・・」

「弥彦にも・・・会いたいですね・・・」

花月の顔から笑いが消える

違うだろう・・・・・・そう心の中でつぶやく。

彼が一番、会いたいのは・・・・・・閻老子・・・・・・

この檜山夢幻齋、本名 檜山史也は、土御門高彬の最愛の従者だった蘇芳の転生である。

彼は、崇り神と化した高彬の転生を鎮めるために存在していた。

閻老子は、彼の最愛の主人である高彬の独り息子の高平・・・

幼い時から、蘇芳が高平の養育を任かされていた。関心が無いはずがない。

「とりあえず、日巫女様にお会いできたので、よしとしましょう」

「夢幻齋様・・・」

「潮音さん、私はこの件には関わられません。私は私の主人、土御門正宗様のために待ち続ける身・・・」

何十年も前に主従の契りを交わし、ともに戦い勝利したが、正宗は夢幻齋を庇って命を落とした。

一必ずまた来る。待っているー

その言葉を胸に、夢幻齋は自らの時を止めて、正宗の転生を待ちつづけているのだ・・・・・・

「お前も辛いな・・・」

花月の言葉に、夢幻齋は寂しく笑う。

「お互い様ですよ・・・」

「斗織、呼びましょうか？」

潮音が携帯を取り出してたずねる。

「いや、今は時ではないようだ。いづれ……」

そういつて夢幻齋は立ち上がる。

「お帰りですか？」

「クライアントとの約束がありますから……」

去ってゆく長髪の後姿を、潮音と花月は見送る……

互いに背負ったものはたやすくはない。

それを皆、知っているから別れる時は無言で立ち去る。

どんな言葉も気休めでしかないからだ。

「潮音、ありがとう、わざわざ呼んでくれて。夢幻齋に会えてよかった」

重要な会話が交わされたわけではない。しかし、それよりも重要な時を過ごしたと思える。

「弟子を頼むぞ……」

そういい残して、花月も潮音の家を後にした。

「宮様は、今日で18におなりですね」
月子の髪を梳きつつ、日輪はつぶやく。

「帝には、ご報告いたしました」
かすかに月子の頭が動く。
「よろしいですか……」

沈黙が流れた。

何故、月巫女が2人いるのか……何故、その巫女が男と女なのか……
その答えを月子は知っている。

（しかし……こんな出会いではなく、普通に出会って結ばれたかった）
叶わない願いは空回りする。

「私は、泰隆が心配です、あやつは堅物で、女人との付き合いが皆無ですので……
どうなる事か……」

術に関しては極悪非道、自らの命さえいとわない泰隆が、今度ばかりは迷っている
一いっそ、他の女なら簡単だったのに一
日輪にだけ、そんな弱音を吐いた。

泰隆にとっては自らの頭の前から足の先まで、すべてが術の為の道具でしかない。
月巫女の使命を受けて生まれた瞬間から彼は、男という性別さえ捨てていた。
子孫を残すのが使命だというのなら、彼は淡々と繁殖行為を行うだろう。
そんな彼が迷っていた……

「日輪……私も自信がない。他の者達のような艶が、私には無いようだから……」
周りの女御達は色事に忙しい。確かにあでやかではある……
その中で、男装して陰陽寮で育った日輪と、何者をも寄せ付けない、清い光を放つ月子は異色の
存在だった。

「宮様……これが一番大事な事なのです」
そして、こればかりは日輪さえ手助けすることは不可能だった。

「泰隆……明後日。よいな」
陰陽寮に赴いた日輪が、泰隆にそう告げた。

「日輪様……」
「お前はややこしい男だな。普通なら、役得と喜ぶものを……」
「日輪様！」

泰隆の姿が涙でかすむ……

「使命も使命じゃが・・・悔いを残すな。お前は心を持った、血の通った人間なのだ・・・それを否定するな・・・それに、しくじると後が無いぞ」

この戦いでは勝てない。延長戦に持ち込むために、未来へ繋ぐ者が必要だった。

「なあ、泰隆・・・せめて、愛しいものを抱いて逝ってはどうか・・・」

それが日輪の最後の願いだった。

「宮様、少しお話をしたいですか・・・」

御簾の内で、泰隆と月子は対座した。

日輪が泰隆の手引きをし、月子の元へ送った。帝も承知の逢瀬である。

闇にろうそくの灯りだけがともっている。

月子の顔がはっきり見えないのが残念だった

（これが顔を拝見する最後の時というのに・・・）

しかし、気配とほのかな香が漂い泰隆を不安にする。

「私は壊れてしまったようです。陰陽師としては失格です・・・」

「何故・・・」

「お許してください・・・」

暗闇に隠れて泰隆は泣いていた。

「頭殿・・・私では・・・だめなのですか・・・」

うすうす感づいてはいた・・・こうなる事を・・・

(何故、こんなに愛してしまったのか・・・使命すら果たせないほどに・・・)

握ったこぶしが震える。

「泰隆様・・・」

伸ばされた月子の手を逃れて、泰隆は部屋を出る。

「月子様・・・」

控えていた日輪が駆け寄った。

「私は・・・あの方に情を掛けていただくことも出来ないのか？そんなに不出来なのか」

泣き崩れる月子を、日輪が抱きしめる。

(泰隆・・・どうするつもりだ・・・)

日輪は唇をかんだ。

泰隆は最大の過ちを犯した・・・

（都も、この世も犠牲にして、月子様を守るなど矛盾している・・・）

満月は夜空に紅く輝いていた・・・

屋敷の外で泰隆は空を仰ぐ。

右手を月に翳し、泰隆はつぶやいた。

「まだ終わってはいない・・・最後の術を、私はこれに託す・・・」

それは敵を欺くための作戦でもあった。

「斗織ちゃん、どうしたの？」

彰と昼食をとりながら上の空の斗織に彰は首をかしげる。

「あ・・・ごめん。夕べ夢みちゃってさ・・・月子様の・・・」

秋口に入ると斗織は、にわかになんかの夢を見始めた。

氷月の継承を目前に、能力が目覚め始めたのだろう。

事実、彰も斗織も花月さえも、神経質になっていた・・・

「彰君、月子様が氷月から泰隆公の子を身籠ったのは、偶然じゃなかったのね・・・」

「斗織ちゃん・・・」

彰の箸がとまる。

「失敗したと見せかけて大逆転を狙ったんでしょ？」

彰は窓の外に目を向ける。

そうとる事はたやすいが・・・

彰は知っている。それは泰隆が後でこじつけた言い訳だと・・・

確かに、泰隆亡き後、身重の月子は狙われる。

次の月巫女の系譜を撲滅するために・・・

「斗織ちゃん・・・愛しすぎるという事は、愛さない事と同じなんだろうか・・・」

そんな彰の横顔は、大人びていて見知らぬ人のようだった。

「でも、男は勝手だよ。泰隆公は、とんだナルシストだ・・・」

確かに・・・彰はうなづく。

あの時は気づかなかった。自分が月子をどんなに傷つけたか・・・

自分が彼女に望まれているなど、思いもよらなかったのだ。

「泰隆公も後悔しているよ・・・きっと。」

二人は黙って再び食事を始める。

「でもさあ・・・斗織ちゃんくらいは元気でいて欲しいな。こんなときだからこそ」
弁当箱をしまいながら彰は笑う。

「そうだね～ごめんね～なんか力なくて・・・」

苦笑しつつ、頭をかく斗織・・・

月子を思えば心が痛いだろうことは、百も承知だ。しかし、彰はいつも斗織の笑顔に励まされていたのだ。

「今度は僕が励ましてあげるよ。え～～～と・・・」

頬杖をしてしばし考える彰・・・

そんな彼を見つめつつ、斗織は彰がどこか遠くに行きそうで不安になる。

「布団が吹っ飛んだ！」

え・・・・・・・・

いきなり彰の口から、彰らしからぬ言葉が発せられた。

「アルミ缶の上にあるミカン」

はあ？これは夢なのだろうか・・・現実ではありえない・・・

「これが最後だよ、画鋏が刺さった！がびよ～～～ん」

ぐあああ～～～～

青ざめた斗織の目の前には、かなり落ち込んだ彰の姿が・・・・・・・・

「やはりダメだ・・・僕にはセンスないや。いつも斗織ちゃんはこのこと言いながら僕の事、励ましてくれたのにねえ・・・・・・・・」

そうか・・・・・・・・斗織は笑う。

彰は言い慣れないオヤジギャグをかましつつ、斗織を元気付けようとしたのだ・・・

それは、ある意味、捨て身の行為だった・・・・・・・・

「ありがとう、私のために・・・その気持ちが何より嬉しいよ」

「そう？逆に励まされた感じはなくは無いけど、斗織ちゃんが笑ってくれたからいいよ。斗織ちゃんの笑顔が僕の元気の元だって、忘れないでね」

うん・・・・・・・・斗織はうなづく。

自分は彰を守ると決めたのだ。だから彰の前では笑顔でなければ・・・・・・・・

「ごめんね、もう元気になったから～」

そんな斗織の笑顔を、教室の隅で総一郎は見つめていた・・・・・・・・

放課後、総一郎に呼び出されて、斗織は屋上に向かう

総一郎が、貸していた”あぶさん”を返すというので、人気のない屋上を指定した。
彰の目もさることながら、先生に見つかって、没収されてもしゃれにならない。

屋上のドアを開けると、もう総一郎は来ていた。

「石田は一緒じゃないんだ・・・」

「いつも一緒でわけじゃないよ・・・」

秋の空は高く、青く澄んでいる・・・

「そうだよな～付き合ってもいないし、プライベートはあるよな」

学校でも別行動する事も多い。

お互い、同性の友達といるときは、遠慮して近づかない。

「ありがとう、読んだから返すよ」

総一郎が差し出す紙袋を、斗織は受け取り、カバンにしまう。

「保志くんは・・・親しい友達いないの？」

いつも一人で行動している総一郎が気になった。

「心を許せる奴が見つからなくてさ・・・」

「彰君に付きまとしてたよね・・・」

「気になるのか？」

なるといえばなる・・・

「今は・・・夕月に関心大なんだけどな～～～」

ぎょっ・・・なにそれ・・・斗織は思いっきりひく。

「じゃ～行くね・・・」

立ち去ろうとする斗織の腕を、総一郎はつかんだ。

「待てよ、ちょっと話をしよう」

「ないよ・・・話す事なんて・・・」

斗織はあまり、男子学生と親しく話したことはない。

第一、何を話していいかわからない

「何で石田とだけは、あんなに親しいんだ？」

「幼馴染だし・・・」

「前世の恋人だから？」

え・・・・・・・・

総一郎は弥彦の転生だ。彰と斗織の事を知っていてもおかしくはないが・・・・・・・・

「なんで前世にこだわるんだ？」

「そう言う保志君は・・・どうなの？」

首を振りつつ総一郎は、空を仰ぐ。

判らない……

前世ゆえに自分は斗織が好きなのか……それとも……

「保志君……保志君は源弥彦の転生で、私達とは敵だと知ってるよ。でもね、私はクラスメイトとして接したいと思っている。前世にこだわらずに……」

何のわだかまりもない笑顔……欲しかったのはその笑顔。

「俺の事も、石田みたいに好きになってくれる？」

「う～～～ん……先のことにはわからないけど……じゃ、行くね……」

出て行く斗織の後姿に、総一郎は微笑みかける。

前世とは違う未来……それが見える。

きっと、自分が斗織に魅かれるのは、そういうところなのかもしれない。

そして、彰はその温かい光に照らされて、今まで生きてきた……

その光を自分も望んでしまっている。

もう、後悔はしたくない……そう思った。

「総一郎、最近疲れているようだな・・・」

本家、矢守の当主である 愁月^{しゅうげつ} が保志家を訪れ、夕食をともにした・・・

「大祖父様、私は総てに疲れました。この件から降りさせていただいてよろしいですか」

「ならぬ。お前は弥彦の転生じゃ」

それが何になる・・・嫉妬のために友を裏切った、そんな男の転生など・・・

そして、弥彦に裏切りをそそのかしたのは・・・闇老子・・・

現在は 矢守愁月^{やもりしゅうげつ} を名乗る、目の前の男である。

「また、私に裏切れと？」

「総一郎！言葉を慎みなさい」

母にたしなめられて、総一郎は俯く。

「月巫女に惚れたか？本気で・・・それが、お前が弥彦の転生である証拠じゃ」

違う・・・総一郎は唇をかむ。

「お先に失礼いたします」

いたたまれずに、席を立つ総一郎に、愁月は冷たい笑みをむけた。

自室に戻ると、ベッドに倒れこむ。

昨日の夢はまだ、総一郎にダメージを与えている。

一本気で月子様を愛していたなら、このようなことは出来ぬはずだ一日輪が弥彦を罵倒した。

一知っておったのだろう？護符を剥がせばどうなるか・・・一知らぬはずは無い。

弥彦が、帝の寝所から剥がした護符は、泰隆の施した術であった。

何度も、ともに任務を遂行した弥彦なら、泰隆の護符くらいは見分けがつく。

いくら、ダミーにまぎれていたとしても・・・

結界をとかれ、泰隆は闇老子の放った妖怪に襲われた。

遠隔操作で、泰隆に力を送っていた月子は、この異変に駆けつけ、帝を守護していた日輪に露見したのだ・・・

泰隆さえいなければ・・・そんな思いに魔がさした。

月子を危機に晒す事になるとも知らずに・・・

そして、友を失った・・・・・・・・

本当に、弥彦は自分の考えでした事なのか・・・・・・・・

総一郎には、わからない

確かに、恋敵ではあったが、親友だった。泰隆は、命がけで自分を庇った事もある。

後悔した、何度も・・・・・・・・彼は後悔していた・・・・・・・・

そそのかしたのは・・・・・・・・弥彦の家、左大臣家に滞在している翁・・・・・・・・

「もう、後悔したくは無い・・・・・・・・」

弥彦の生ではなく。保志総一郎としての生を生きたい。

月子の使命を担った斗織が、自分の生を生きようとしているように、自分も

そうでありたいと思った。

「頭殿！」

月子は泰隆の前に立ちはだかり、結界を張る。

守備を任した泰隆は攻撃に集中できる……

氷月の剣は一振りでも何百万の妖怪を消滅させることができたが、

消しても消しても妖怪は、どこからとも無く湧いてくる……

「宮様！危険です……」

最前線から月子を非難させようとする弥彦を、月子は静かに拒む。

「頭の中將殿、どうしても、命を掛けて守らなければならないものがあります」

背信者に向けられた瞳は、冷たく光っていた……

「泰隆……これは元を断たなければ意味が無いぞ」

傍で援護しながら、日輪は叫ぶ。

斬っても斬っても湧いて出てくる妖怪……

送り込んでいるのは、閻老子……黒幕を倒さなければ、きりが無い。

そして、二人とも力尽きて、妖怪の餌食になるだろう……

泰隆は念を飛ばして閻老子を探す。

屋根の上……ちょうど、ここ、帝の寝所の真上に彼はいた。

「宮様、一瞬だけ結界を解いてください。」

そんな事……月子は泰隆を見る。

「閻老子を倒さなければ、私達に勝ち目はありません。少し犠牲を払っても元をしとめましょう」

そう言って呪符を取り出し、印を結ぶ泰隆を、月子は結界の外に送る。

「頭殿……」

妖怪の渦巻く中へ飛び込んでゆく泰隆を、月子は案じつつ、見送った。

数分後……緊迫した空気の中で、閻老子と泰隆は月子の目の前に落ちてきた。

氷月の剣で肩口を切りつけられてはいるが、閻老子は致命傷は負ってはいない。

一方、泰隆は……

無防備な状態で闘ったため、負傷し、とどめを刺す体力は残されていない……

「とどめを刺さなければ……」

月子は自らの背に背負っている、銀の鏃の矢を引き抜く。

矢を握り締め、閻老子に駆け寄るやいなや、敵はすばやくすり抜け、

泰隆の体を乗っ取った。

「頭殿！」

「お前は、この男を殺せまい。おかしなまねをするな！泰隆を死なせたくなければな」
人質・・・

日輪も月子も青ざめる・・・

そして、閻老子は泰隆の身体に入ったまま、月子に歩み寄る・・・

「月巫女はしくじった・・・お前は、泰隆の血を引く後孫を産むことはない。
そして・・・ここで死ぬのだ。愛する男の手にかかって・・・」

泰隆の手が月子の首を絞めた。

反撃する事は出来ない、しかし、このまま月子が閻老子に殺されても泰隆は
助からない・・・

(私は、頭殿を救えない・・・)

月子の目から涙が流れる・・・

「頭殿、役に立たなくて・・・申し訳ありません・・・」

見るに見かねて駆け寄ろうとした日輪を、何者かが羽交い絞めにした。

姿のない何かが・・・

「碧凧？！お前か？」

「今は会えぬ・・・いずれ、会おう」

「離せ！離さぬか！」

目の前で月子が、閻老子に操られた泰隆に殺されるなど、あってはならない。

「碧凧！おのれ・・・」

この生き地獄を、なすすべもなく弥彦は見つめていた・・・

事態を混乱させたのは自分・・・

親友も、愛する女もすべて失う・・・

(宮様・・・)

薄れ行く意識の中で、月子の脳裏に泰隆の声がかすかに聞こえた・・・

—宮様・・・私を封印してください—

泰隆の声が脳裏に響く

—他に方法がありません、閻老子ごと封印しましょう—

しかし・・・

—宮様、まだ終わってはおりません。私は未来への鍵を宮様に託してゆきます。

探してください。後孫は存在します—

閻老子に悟られてはならない・・・

月子は結界を密かにとき、泰隆の後ろに異空間を作る。

まだ、泰隆の事は諦められなかった。

何とかして泰隆だけを引き戻せないか・・・そんな考えで充満していた。

暗黒の閻が広がり泰隆を引き込んだ瞬間、月子は泰隆の腕をとる。

「未来への鍵を貴女に・・・」

何かエネルギーのようなものが、手を通して、月子の身体に流れ込んだ

—氷月の剣・・・—

これは神剣の伝授だ・・・

台風のように風が吹き荒れる室内に、泰隆の手を離せないまま、月子はたたずむ

巨大なブラックホールに、妖怪たちがなだれ込んで、泰隆の中に入り込む。

—おのれ・・・ワシを妖怪ごと飲み込んで、封印する気か！—

形勢が逆転して閻老子は、泰隆に押し込められる。残っていた最後の能力で・・・

「はやく、異空間を閉じてください。私の息のあるうちに・・・」

手は泰隆によって無理矢理引き剥がされ、瞬時に閻に飲み込まれた。

「頭殿・・・次は必ず、貴方を守ります」

力なく、異空間は閉じられた。月子の手で・・・

—私は結局、陰陽師として死ぬませんでした。ただ、貴女を守りたかった。

貴女のいる、この世界を守りたかった・・・宿命も使命も、どうでもいいのです・・・

生きてください・・・—

それが氷月に託された泰隆の遺言だった・・・

そして・・・6ヶ月後 月子の身体に変化が現れた・・・

最後の戦いから6ヶ月・・・

月子は体調を崩し、床に伏すようになった。

「日輪、月子はどうしたのじゃ？」

帝に呼ばれて御前に伺った日輪は、あたりをうかがう。

「よい、話せ。人はおらぬ。」

「はい、月子様は、御懐妊されました」

「なに・・・」

泰隆との事は何も無かったと聞いていた。それに泰隆が死んで6ヶ月後に妊娠とはありえない。

「誰の子じゃ・・・」

「泰隆の子でございます」

「ありえん」

はい・・・日輪はうなづく。

ありえない。

しかし月子は奇跡を起こした。

「しかし、泰隆は、氷月の剣に後孫を託し、月子様はそれを受け取られた・・・」

「剣に・・・」

泰隆の体内に存在した剣から、月子が泰隆の遺伝子を引き出すことは不可能ではないだろう。

「月子は未通女のまま、子を産むというのか？」

「はい。宮様ご自身、泰隆の子であるとおおせられました。間違いありません。

最後まで、泰隆は自分の身を術の道具としました。それでもなお、陰陽師として

死ななかったと言うたそうです。お分かりですか？あやつはただ、月子様のためだけに戦うたのです・・・どれほどの強い想いで剣に未来を埋め込んだ事か・・・」

はあ・・・帝は涙を袖で拭う。

充分判る・・・しかし・・・

「月子は、辛い道をゆくのを・・・」

「いいえ・・・今、宮様は、とてもお幸せなお顔でいらっしゃいます。泰隆の死後これほどの穏やかな御表情は無いほど・・・愛するものの形見を得ると言う事はそういう事なのでございます」

「閻老子は？」

「恐らく、碧凧が閻一髪で救出したものと思われます。微弱ですが生命反応を感じますので」
終わってはいない、未来に持ち越された戦い。

月子と泰隆の血を引く一族から、月巫女は現れる。

「なんにしても・・・不憫な姫じゃ」

月明かりの中、帝は父親の苦悩をにじませた。

「私が、お守りいたします。次の月巫女が現れるまで」

それまで死ぬ事も叶わない日輪は、遠い未来を誓う。

孤独な、果てしない道のりを・・・

運命に従うものたちを、月は淡く照らし出していた・・・

夕月神社を尋ねてきた和彦を、花月は竹林に連れ出した。

もう、風は肌寒い。

秋本番である

「最近、夕月も石田も元気ないですが・・・」

職員室で二人の担任の関も心配していた。

「ナーバスになるのも仕方あるまい。彰はともかく、弟子までがあの夢を見るようになったからな」

「前世の・・・ですか」

ああ。

一番、衝撃の強い、泰隆の最期・・・

「あの脳天気があんなに影響を受けるとは。だんだん、弟子の中の月子様が目覚めている証拠だ。今じゃ彰のほうに気を使って、オヤジギャグかましてるぞ」

頭痛がしてくる和彦・・・

「いくらなんでも、彰が不憫でろう」

そう言う花月自身、いつもの強烈なマイペースはどこかに行ってしまった。

「花月さんも、元気ないですね」

最後の戦い・・・その重さに関係者一同、緊迫している。こんな時だからこそ花月の傍にいてやりたいと和彦は思う。

「私はよい。とにかく、まず、月巫女の氷月の剣の継承を無事に終えなければな」

「少しは、息抜きしましょう」

笑いながら、和彦は花月の手をひいて歩き出す。

「おい、どこへ行く？」

「ドライブして、お茶して・・・そうだ、映画でも見ますか？」

「そんな暇、どこにある！」

この非常時に・・・と眉間にしわがよる花月。

「数時間くらい、構わないじゃないですか？あなたは永い間、巫女の仕事してきたんだから」

思い出を少しでも作りたかった。別れが迫っているのなら、なおさら・・・

「離せ！」

照れて、困り顔の花月を、笑いながら和彦は連れ去る。

「あなたも、元気になるないと。夕月や石田を守らなきゃいけないんですから」
気の遠くなるような時間を 花月は過ごした。しかし、それらはもう戻る事は無い。
今の一分一秒は今だけのもの。

「そうだな、悔いを残さないように、時間は大切に使うべきだな・・・判った

どこへでも連れて行け」

ぎこちないデートの始まりだった・・・・・・・・

11月2日。彰と斗織の18歳の誕生日に、潮音は二人を自宅に招待した。

氷月の剣の継承は、月の巫女が18歳を迎えた後になされる。

この日を境に、戦況は一変する事は目に見えていた。

だからこそ今日だけは、楽しいひと時を共に過ごしたかったのだ。

学校から直接、街森家の車で屋敷に着いた彰と斗織は、応接室に通された。

「おお、来たな二人とも」

応接室では、ソファで一人紅茶を飲んでいる花月の姿があった。

「師匠、お越しでしたか。お姉さまは？」

潮音の姿が見えないのでそう聞くと、いきなりドアが開いて、潮音がケーキを持って入ってきた。

「いらっしゃい、斗織、彰君。ごめんなさいね、ケーキ焼くのに時間がかかってしまったわ」

そう言って、手にしているポットとカップのトレイをテーブルに置くと再び出て行く。

「お姉さまのお手製のケーキなんて懐かしいなあ。セント・ローザンにいた時以来だわ〜」

テーブルに置かれたポットでお茶を入れながら、しみじみと呟く斗織の後ろから、再びドアを開けて入ってきた潮音が微笑みつつ、ケーキをテーブルに置く。

「そうね、大学生になってからは忙しくて、お菓子作りもしていなかったわね」

これから、もっと忙しくなる。これが最後の息抜きとなるだろう。

そして、こうして4人が顔をあわせる事は、これが最後である事を、皆がどこかで感じている。

花月は勿論の事、月の巫女として戦う斗織も無事に生還出来る確証はない。

「私は終わらせるための戦いだが、お前達は自分の人生を開くための戦いだから無事に生還しろ。特に彰は泰隆から解放される時が来るのだから、希望を持ってよ」
ケーキのろうそくに火をともしつつ、花月は微笑む。その笑みに彰は胸を詰らせる。

「師匠も共に生還しましょうよ」

「あほ！これ以上生きながらえさせる気か？それこそ拷問だろうが」
と斗織を小突きながらも、花月は、一人残される和彦の事を思った。

—覚悟しています—

—俺が貴女を看取ります—

強気な和彦の言葉の裏には、哀しみが隠されている事を知っている。

別れの哀しみを思うと、誰かに出会う事さえ躊躇われるが、出会ってしまったものは

仕方が無い。

誰にでも、出会いと別れはある。花月は人一倍長く生きた故に、人より多く経験した
だけなのだが・・・

（そう、そう割り切るしかないな）

物思いに耽る花月に、斗織はカットしたケーキを差し出す。

「師匠～元気だしてくださいよ～はい、ケーキ」

そうなのだ、今、花月が最大限に意識するべきは、目の前にいる月の巫女なのだ。
今まで生き延びた理由も、この月子の転生であり、月子と泰隆、二人の血を引く
サラブレットの出会うためであった。

そして・・・宿命の姉、碧凧との決着をつけるため。

考えている暇は無い。

「剣の継承に向けて、明日からビシビシしごくぞ！」

花月の言葉に、斗織は頷く。

「はい、頑張ります」

泣いても笑っても、もう後が無い。4人は来るべき戦いに思いを馳せた。

一月巫女が18の誕生日を迎えた。お前は心してかかれー

矢守愁月は斗織の誕生日、11月2日の夜に総一郎にそう告げた。

もう、避けては通れない。運命は回り始めた。18歳を迎えた斗織は正式に月巫女として完成した姿で自分の前に現れるだろう。その時、自分はどうする・・・

(また俺は、泰隆と月子様を裏切るのか?)

月子への想い、斗織への想い・・・

自分はどうしたいのかさえ判らない。

斗織と彰を動揺させるために二人に近づいた、二人に放った言動はどれが真実でどれが偽りなのか。または全てが真実で全てが偽りなのか?

「保志くん、ぼーとしてどうしたの?次、視聴覚室だよ」

後ろから斗織の声がして、総一郎は振り向く。

いつの間にか伸びた髪を後ろで束ねて、斗織は巫女の面影を宿していた。

そうだ、彼女は巫女なのだ。何故今までそう思わなかったのか?

ドジで天然で、人並みの容姿で、女子の中に埋もれていて、特に何のとりえも無いごく普通の女子高生。

誰がこんな彼女の事を、特別な使命を受けた月の巫女だと思うだろうか。

月子が泰隆との霊的契りを持って、産んだ子の末裔だと思うだろうか。

来るべき戦いの時に備えて紡がれた血筋、受け継がれるDNA・・・その果てに現れた最終兵器としての少女。

今、彼女は巫女の風格を備えて、総一郎の前に立ちはだかった。

「ああ」

椅子から立ち上げる総一郎を、通り過ぎてゆく斗織、その隣には・・・彰。

入り込めなかった、最初から無理だったのだ。

女三宮、月子内親王。初めから手の届かない存在だった。

何を錯覚したのか・・・自分の馬鹿さに呆れる。

二人の後ろ姿を見つめつつ、視聴覚室に向う総一郎の視界が翳む。

泰隆がいなくなれば、自分が月子を守れるーそれは大きな錯覚だった。

自らの裏切りは月子、いや朝廷、都、全てを危険に晒した。涙が総一郎の頬をつたう。

愛する女人と親友を一度に失ったあの夜に、弥彦の心も死んだ。嫉妬やねたみの心は誰も救わない。

(何故、今になってこんな事を思い出すのだ)

矢守愁月が保志総一郎に望むのは、裏切り。

占い、呪術界を牛耳っている矢守愁月が、氷月の剣を手に入れば無敵だ。

政界、財界の黒幕となり、長年の権力者への復讐は果たされるだろう。

逆に、愁月の行く手を阻んでいるのが氷月の剣でもある。

それは愁月を倒すために存在しているのだから・・・

戦いの中でしか、接点を持つ事の出来ない月の巫女、夕月斗織。

何故、関心を持たず、今までスルーしてきたのか今ならわかる。

自分の中の弥彦が、斗織の中の月子を求めていた。関われば、魅かれていく事は目に見えていた

。

しかも・・・今世でも、月子は泰隆しか見てはいない。

（辛い、泰隆が憎い。俺はあの男に負けるために存在しているのではない）

手にした教科書を総一郎は握りしめた。相反する2つの想いが総一郎の心を引き裂く。

授業中も、総一郎は斜め前の席の彰を見つめていた。

当たり前のように、彰の傍にはいつも斗織がいる。それだけではない、やはり当たり前のように、斗織の愛情を一身に受けている。

最初はそれが気に入らなかった。

今は・・・ただ、彰に向けられている斗織の笑顔が欲しかった。

深夜、彰は夢にうなされて起きた。

しかし過去の夢ではない、自らが、巫女装束の斗織を氷月の剣で切り裂く夢だ。

背後で嘲笑う総一郎の姿があった。

斗織の血にまみれて叫んだ自らの声で目覚めると、汗を拭い、喉の乾きを感じてカーディガンを羽織ると部屋を出て、水を求めて台所に向かうために暗い廊下を歩き始めた。

長い廊下を歩いていると、縁側に座り庭の桜を眺めつつ、徳利と杯を手にした花月の姿があった。

「彰、こんな時間に何うろうろしておる？神社内で夜這いは不謹慎じゃぞ」

月明かりに照らされた花月の面影は、月子の寝所に忍んで行き、決意できないまま立ち去ったあの夜の日輪の面影を宿していた。

「あの夜、手引きをしたのは日巫女様でしたね」

笑いながら、彰は花月の隣に腰掛ける。

「ああ？あの夜か・・・この意気地なしー」

と、花月は、かなり酔った体を持たせかけてきた。

「お前も真剣に考えての事かもしれんが、めっちゃめっちゃ相手の女に失礼だぞ？」

彰は泰隆の転生である。泰隆自身ではない。知りつつも愚痴る相手がないので彰に愚痴るのだろうか・・・気持ちはわかるが、彰には答える術がない。

「あ、僕、のどが渴いたので台所に水を飲みに行く途中だったんです」

あまりかわりたくない彰は、そう言って立ち上がろうとした。

ぐいー

そんな彰の腕を引っ張り、花月はもう一度座らせた。

「ちょうどマンゴージュースもあるから、これを飲め」

冷蔵庫から持ち出したらしい、マンゴージュースのペットボトルを花月は持ち上げた。

「それは、斗織ちゃんのお風呂上りの一杯用じゃないですか？」

「かまわんかまわん。飲め～」

と、脇においてある、使っていない杯を彰に持たせ、マンゴージュースを注いだ。

「そのお酒もお神酒でしょ？」

杯のマンゴージュースを飲み干しつつ、彰はため息混じりにそう言う。

「気にするな～まあ、しかし結果的には泰隆の逃げ勝ちだったがな。あんな逆転劇があろうとは閻老子も思いもしなかったろうな。しかしだ！泰隆、お前は陰陽師としては一流だが男としてはできそこないだぞ」

確かに、最終的には月子の泰隆への想いによって成就した月巫女の血統であった。

「彰も、弟子の足ひっぱるなよ。前世で学んだと思うが、愛情、恋慕の情が一番厄介だ。そんな感情のために戦いに負ける。人は弱いからのう」

前の戦で、泰隆は老子に体をのっつられ、月子を殺そうとした。

そして、先ほどの夢・・・

月子は泰隆に襲われても反撃できない。泰隆が死ぬくらいなら自分が死ぬことを選ぶ。おそらく斗織も同じだ。

「今世での僕の役割は、なんなのですか」

前世では泰隆として、最前線で戦った。が、今世では月の巫女である斗織に守られる身である。花月は月を見上げる。いつの時代も月は変わらず空にある。花は季節がめぐれば地を飾る。途切れることのない自然の生命・・・終わることのない自らの生を、彼女は月と花に見て、花月と名乗った。もう、遙か昔のことである。

「お前は泰隆と月子様を開放するという役割があるだろう？確かに、今のお前は弟子の弱点ではないけどなあ」

「はっきり言いますね」

苦笑しながら、花月は彰の杯にマンゴージュースを注ぐ。

「お前に遠慮する筋合いはないからのう」

そうですか・・・頷きつつ、彰は2杯目のマンゴージュースをあおる。杯が小さすぎて、なかなか喉の渇きが癒えない。

「正直、どうなのじゃ？弟子とは？」

彰は言葉に困る。あまり意識していなかったのに、総一郎に掻き乱されて余計に判らなくなってしまっていた。

「クオリティーは、やはり落ちるだろう？お姫様の転生があれではなあ」

ふと、彰は考える。月子を愛したのは安部泰隆である。石田彰ではない。

月子そのままの姿と人格で、斗織が自分の前に存在したとして、自分はそんな斗織を好きになるだろうか？

「どちらかというとは僕は、月子様より斗織ちゃんみたいなタイプの方が好みみたいなんです。たった今、気づいたんですけど」

笑って、泣いて、怒って・・・彰の横でいつもうるさい斗織。しかし、そんな斗織がいないと、寂しくてたまらないのだ。

中学時代3年間は山奥に潜んでいて、斗織とは離れ離れだった時があるが、とても不安だった。自分を守ってくれるものを失った感じがした。斗織はいつしか自分自身の一部になっていた。夢を渡って体験した限りでは、泰隆と月子はそこまで近い関係ではなかったと思われる。お互いを守ろうと、傷つけまいとしてわざと遠ざかるような、悲しい関係だった。

「できれば、総て終わって、私が逝った後の弟子の事はお前に任せたいのだが、お前に他に好きな女ができれば、それはかなわぬからのう」

「斗織ちゃんこそ、月子様から開放されたとたん僕の事なんか、なんでもなくなるかも知れませんかよ？」

最後まで愛されるという自信がなかった。今まであまりにも当たり前のように斗織の愛情を受けてきたが、もしかすると、それは前世の故ではないかとも思えてきたのだ。

「その自信喪失は弥彦の転生、保志総一郎のせいかな？」

月子、泰隆、弥彦・・・前世も今世も3人の心の糸は微妙に絡まっていた。

いつものように斗織が彰と共に家に帰ってくると、花月が玄関で待ち伏せていた。

「すぐ巫女装束で神社の祭壇に行け。彰はカバンを置いて私と行くのじゃ」

巫女装束で祭壇・・・言わずとも何が起こるのか、2人にはわかった。

「斗織ちゃん・・・」

斗織は頷く。18歳の誕生日を迎えた時から、この日の事は覚悟していた。

月の巫女として避けては通れない道である。

「禊は済ませてから来るのだぞ」

そう言って、花月は背を向けて、彰を伴って立ち去った。

剣の継承の日時などは、前もって伝えられない事になっている。

どこから情報が漏れて邪魔が入るか判らない。そのために花月の一存で

儀式の1時間前に、関係者に伝えられることになっていた。

斗織は自分の部屋に入るとクローゼットから巫女服を取り出し、禊のため沐浴所に向かう・・・

花月と彰が祭殿に入ると、たった今、着いたばかりの和彦がいた。

「すみません、遅くなりました。皆さんすでにお揃いですね」

放課後、職員室からすぐに飛んできたのだろう。しかし、和彦は式服を身に着けていた。

「和彦、早いな。すでに式服とは準備がいいではないか」

「井上先生、いつの間にこられたんですか？というか、先生を呼んだのは日巫女様ですか？」

学校は自分たちと同時に終わったはず・・・なのに教師である和彦は目の前にいるという

のが、彰には不思議でたまらない。

「結界は丈夫なほうがいいからな、とりあえず使えそうな術者は皆呼んだ」

ああ・・・彰は頷きつつ祭殿の中を見回す。関係者は非常事態に備えていただろうが

いきなりの徴収に、この人数がもうすでに集まっているのが驚きだった。

斗織の母はもちろん、松栄をはじめとする神社の神官たち

—もちろんその中には彰の実の父もいる—

さらに潮音は、檜山夢幻斎の送った檜山一門の術者の助っ人を引き連れてこの場に

来ていた。

「大掛かりですね・・・」

呆然とする彰の横を、和彦はすり抜け、祭壇の前で守備位置を打ち合わせている輪の中に入る。

「私と彰はここで介添えをする。残りは皆、結界要因じゃ」

氷月の剣はこの神社のご神体であり、月巫女の証である。

今まで長い歳月を経て、今、この日のためにここで守られてきた。

月の巫女である斗織の元にたどり着くために。

当然、敵方の最後の悪あがきも考慮される。なので知られてはいけない。こっそりと迅速に行われなければならない。

「彰、案ずるな。剣を継承しようがしまいが、弟子は何一つ変わらぬ。

ただ・・・今まで以上に狙われる身となるだろうが、防御力もアップするから問題ない」
ははは・・・と笑う花月の目が笑っていない事に気づいた事を、彰は後悔した。

天下無敵の日の巫女が緊張している・・・冗談さえいつも通りでないこの非常事態の緊張をどうすればいいのか。

そして、当の本人である斗織の心中はいかほどか・・・

緊迫した空気の中で、彰は制服の上から、首に下げた勾玉を握り締めた。

「お待たせしました」

巫女装束の斗織が静かに現れた。

いつもの明るさはなく、恐ろしいまでに張り詰めた意識の中で、月子のまなざしを宿して、月の巫女は彰の前に現れた。

「待っておったぞ。さあ、主人公は現れた。そろそろ始めよう」

静かに花月は祭壇の松栄にそう告げた。

一同は斗織を振り返る。

18の、年端もいかぬこの小柄な少女が背負わなければならない宿命を思いつつ……

「一瞬で終わらせるから、気を抜くな。敵の気配を感じるまでは結界を張るな。

お前らの大量の気を悟られると今、ここで何かしてますよと教えるようなものじゃ。

息を殺しておとなしくしてろ。そして、敵の気は迅速に察知するようにな」

最後の花月の注意事項に一同は頷き、それぞれ持ち場に向かう。

一人一人が月の巫女に一礼して……

潮音も和彦も、母も松栄も、ただ無言で斗織にエールを送って去っていった。

「日巫女様、僕は何をしたらいいのでしょうか？」

彰が皆が去っていった後、そう訊いた。

「ただ、見守れ。泰隆の転生として。それが月子様の転生である弟子に、お前がしてやれる唯一の事じゃ」

祭壇の奥の幕の間から八戒が姿を現した。

父亡き後、剣を守り、斗織を守ってきた守護猫である。

しずしずと斗織は前に歩み寄る。母が守り、父が手に携えて戦った剣を持つ黒猫の前に……

「覚悟はよいな、月の巫女」

「はい」

花月の呪文で八戒は人の姿となり、右手を前に突き出した。

斗織は自らがネーミングした某漫画の腹黒キャラの姿をした美青年に近づいてゆく。

「月の巫女、右手で受け取れ」

花月の言葉に頷くと、斗織は右手を八戒に差し出す。

合わさった手のひらから閃光が放たれ、強いエネルギーが流れ込むのを斗織は感じた。

泰隆、月子、母、父、八戒……剣はめぐりめぐりつつ、ようやく主人の元に帰ろうとしていた。

そしてそれは、あっけなく終りを遂げた。

八戒は猫の姿に戻り、斗織は笑顔で花月と彰に向き直った。

「部屋で休め。身体に馴染むまではあまり動かぬほうがいい」

そう言って花月は斗織の右手の手のひらを見つめた。

かすかに、赤い十字の痣ができていた。

「これが消えるまでは横になっている」

そう言って彰を振り返る。彰は顔くと、斗織を支えて部屋に向かって歩き出した。

「八咫鳥、ご苦労じゃった。しかし、もう少し弟子のそばにいてくれぬか？」

カムフラージュのために・・・花月は八戒の頭を撫でる。

「これは始まりの儀式じゃ、これからが正念場だからな・・・」

そう言って抱き上げた八戒と共に花月は祭殿を出た。

大きな満月が夜空に昇り、花月を照らす。その月を見上げつつ、結界要員に念を送り、退却を伝える。

今宵は静かに帰るようすすめた。何事も起こらなかつたように見せなければならない。

そう、いつもと同じ宵なのだ。

だから、いつものように眠りにつけばいい。

斗織を部屋まで連れて行き、彰はベッドに寝かせる。

見た目は気丈に振舞ってはいるが、斗織の中では細胞の隅々までがこの異変に対応するために動き回っており、興奮状態である。

「彰君、これで私は彰君を開放できるんだね」

彰の手を握りしめて、斗織はそう呟く。

氷月の剣・・・夢の中で、彰はこの剣で斗織を刺した。

今、自分の手を握っている斗織の手に収まっているその剣で・・・

彰は未来に不安を感じていた。

「僕はただ守られてきた。守りたいのになんの力もない。大事なものを守ることすらできないなんて・・・」

彰の頬をつたう涙を、斗織はそっと拭い、微笑む。

「そこに居てくれるだけで、彰君は私に元気を与えてくれる。それだけでいい守りたいものがあるから、彰君を守りたくて、私は強くなれるんだよ」

ただ、ただ、愛されてきた自分。無力な自分。しかし、そんな自分を命に変えて守ろうとする少女がいる・・・

「ごめんね・・・ごめんね・・・」

「ねえ、だったら、嘘でもいいから好きって言って。そしたら私、もっと頑張れるよ今だけでもいいから、世界で一番好きって言って」

「好きだよ。嘘じゃないよ、今まで斗織ちゃんがそばにいてくれるのが当たり前で斗織ちゃんが僕を好きでいてくれるのが当たり前だと思いがってた。

そんな時、保志が僕たちの間に割り込んできて知ったんだ。斗織ちゃんを誰にも渡したくないって。僕だけのものでいて欲しいって。これって、好きって事だよねでも、僕は何もしてあげられないから、辛くて・・・」

斗織は笑って、つないだ手の指を絡ませる。

「充分だよ、ありがとう。すごく元気になれる。眠るまでそばにいて」

泰隆の想いがなんとなくわかる気がした。何よりも大切だったのだ。

壊したくなかったけれど、月子は壊れそうな脆さで彼の前に存在していたのだ。

それは、触れれば崩れそうな脆さで、だから触れることさえできなかった。

同級生たちが男女交際をし、好きだからと手をつなぎ、腕を組み、キスをする以上にその何倍も泰隆は月子を愛していた。

絶望的な愛情で・・・

大事すぎて、どんな行動も起こすことができない。臆病で弱虫になっていく・・・

「終わらせよう。悲しい因縁も、悲しい恋も、全て断ち切って、僕たちは幸せになるんだよ」

うん・・・頷くと斗織は静かに起き上がり、彰に口づけた。

「これは、月子様と泰隆公の代わりにしたもので、私たちのは全てが終わってから。まだ、彰君の心が変わっていなければ、その時、彰君がしてくれるかな？」

うん。頷きつつ、彰は斗織をそっと寝かせる。

「わかった。もうお休み・・・明日も学校だしね」

もしかしたら、簡単な事だったのかもしれない。

触れる事は壊す事ではなく、想いを伝え、ぬくもりを伝える事だったのかもしれない。

きっと、彰の中の泰隆もそれに気づいただろう。

気づかせたくて、月子は斗織を通して泰隆に接吻したのだ。

斗織は氷月の剣を通して、月子とシンクロしたのだろう。

(僕も、もう、怖くないよ。君が勇気をくれたから)

彰は斗織の寝顔に、そっと心でそう告げた

「もう、大丈夫？」

学校の昼休み、向かい合って弁当を広げつつ、彰は斗織にそう訊いた。

「うん、手のひらの痣も消えたし、いつもどうり」

しかし、実際使いこなせるのかどうかは謎である。

とにかく、いつもどおりを装う。保志総一郎に気づかれないように・・・

「師匠の訓練は無駄じゃなかったわね、全く違和感ないし、正直あの時すんなり身体に馴染んだのよ」

そう、何も変わりはない。はっちーも変わらず傍にいる。

何も・・・変わってはいけない。

しかし、関係者達は、どこかで意識している。花月の最期を。

「すんなり・・・か。正直あっけなかったかあなあ。もっとすごい儀式みたいなものを想像していたから」

確かに、すごい面々が集められていたが。

「ああ、ああいうものなんだって。師匠が言ってたけど、最初の泰隆公と月子様の

時も戦闘中の一瞬の間の伝授だったし、はっちーがお父さんから受け取った時も

一瞬の出来事だった。まあ、私は何故かその時の事を覚えていないんだけどね」

それは覚えていないのではなく、記憶の封印ではないか・・・彰は、ふとそんな事を考えた。

剣が今まで無事だったのは、斗織が剣のありかを知らなかったからかもしれないと・・・

「まあ、邪魔が入る前にちゃっちゃとしないと横取りされるものね～当然と言えば当然ね」

それはそうと・・・彰は保志総一郎を振り返る。

最近元気がなさそうだったが、今日はいつにも増して元気がない。

「保志慎一郎、調子悪そうだね？」

「うん、大丈夫かな」

総一郎だよ・・・というツッコミもそろそろ面倒くさくなって、最近斗織はそのまま訂正しないでいる。

「やはり、アレかな」

「うん、アレだね」

なんだかわからない会話を交わしつつ、2人はこっそりと保志総一郎の様子を伺う。

「まあ、立場的に微妙だよな、悩んで当たり前かな。この時期・・・」

「うん、それより彰くん気をつけてね。狙われる可能性大だから」

一月の巫女が御神体を携えた今、最大の弱点はお前だ。彰、気をつけろ

斗織様はおそらく唯一お前だけには刃を向けることはできないだろうから。
もし、お前が敵の手に落ちて斗織様と戦うようなことがあれば、全ては水の泡だ一

昨夜、父が部屋に来て、そう言って帰っていった。

普通の家庭と違うので、普通の家庭でなされる会話が石田家には無いという事は
百も承知だが、彰は改めて父にとっては自分が息子ではなく、安倍泰隆の転生である事を実感
した。そういう公的なところで父は生きてきたのだ。

すべてが終われば、父と子として向き合える・・・そう信じている。

自分を守る事が斗織を守る事なのだと、言い聞かせている。

「泣いても笑っても、これが最後の戦いなんだから、後悔しないようにいこうね」

そう言って立ち上がった斗織の背中を、彰は見つめる。

いつの間にか腹が据わってしまった月の巫女に苦笑しつつ・・・

放課後、「月光」の鳴り響く音楽室のドアを、斗織は開けて中に入る。

和彦に呼ばれ、生徒会で遅れる彰を待つ間、音楽室を訪ねることになったのだ。

「先生」

斗織がピアノのそばに立つと、和彦はピアノを引く手を休め、斗織を見上げた。

「夕月、具合はどうだ？」

いつもと変わらない笑顔がそこにあった。きっと心の中は身を切られるように痛いだろうに・・・

「大丈夫ですよ。すっかり馴染みました。出し入れもスムーズにできますし」

と右手を和彦の前に翳して笑う斗織を、頼もしいと感じつつ、彼は立ち上がると窓辺に歩み寄り、夕暮れの木立を窓越しに見つめた。

「先生は、後悔していませんか？師匠と出逢った事を。そして、こんな戦いに首を突っ込んだ事を・・・」

和彦の背を見つめつつ、斗織も窓辺に歩み寄る。

「いいや、とても幸せだ。花月さんに出逢えた事も、あの人をこうして送り出してあげられる事も。感謝しているよ」

え？夕日に」照らされた和彦の穏やかな顔を、斗織は言葉もなく見つめていた。

「あの人最後の人になれただけでも、ラッキーじゃないか？なんせ長生きしすぎて恋人の数も半端ないんだから」

でも・・・でも・・・斗織は涙が溢れて目の前の景色が霞んでくるのを感じつつ、ただじっと耐えていた。

「だから、負けるなよ。夕月はたった一つの希望なんだからな。未来の扉を開ける鍵はお前が持っているんだから」

そう言って、斗織の肩に置かれた和彦の手はとても暖かかった。

「それで、碧凧の情報なんだが・・・」

現在、矢守愁月が連れている星見の少女の名が碧凧と言う事。

その少女はまったく歳を取らないこと、矢守邸の最上階の部屋からは一歩も出ていない事などを和彦は手短かに伝えた。

「師匠と同じように、彼女も自分の時を止めているんでしょうか？」

「いや、そうでもないらしい。7年に一度、矢守一族は愁月に7歳の少女を生贄として捧げているらしい。そして、年を取らないという碧凧は、正確に言うと7歳から15歳まで成長すると、再び7歳に若返るといふ噂が流れていて・・・」

だんだん暗くなっていく音楽室で、斗織は眉をしかめて首を振る。

「それではその生贄の少女は、碧凧の器にされているという事ですか？」

「だろうな、そしておそらく、その器は8年が限度という事らしい。面倒臭い事を、根気よくするもんだ。呆れるよ」

苦笑しつつ呟く和彦の言葉に頷きながら、以前花月が言っていた事を斗織は思い出した。一闇老師は、元々は日巫女を拐うつもりだったらしい。しかし、奴は私を探せなかった。当時、日巫女は男装をして陰陽寮にいた。そして当時陰陽の頭であった父の張った結界により闇老師の探索に引っかからなかったのだ。

月の巫女に出会うとき、日の巫女の魂は月の巫女の中に入る・・・

この場合の器としての月の巫女は斗織である。

時が来れば、斗織は二人分の魂を携えて戦う事となるのだ。

そして、器としての花月の身体は用を終える。

「師匠にもこの事、伝えておきます」

そう、斗織が告げた時、部屋に灯りが点った。

「お待たせ、こんな暗いのに電気もつけないでどうしたの？」

彰が、いつもの笑顔で入ってきた。

「ああ、月が綺麗だな・・・って見てたのよ」

作り笑いで、斗織は彰に歩み寄った。

闇を照らすのは月、その月を輝かせるのは太陽。碧凧は太陽を失った月なのだ。

「さあ、帰ろうか？送っていくよ。帰る途中で新しいクレープ屋できたらしいから

寄って食っていくか？奢るよ」

「そうですね、師匠にもテイクアウトして、差し入れしましょう。神社でデートしたらいいですよ～」

空元気見え見えの斗織は、和彦の腕をとり、出口に向かって歩き出した。

夕月の巫女

<http://p.booklog.jp/book/36921>

著者：夕月斗織

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/moon83/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/36921>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/36921>

表紙イラスト SAYO様

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ